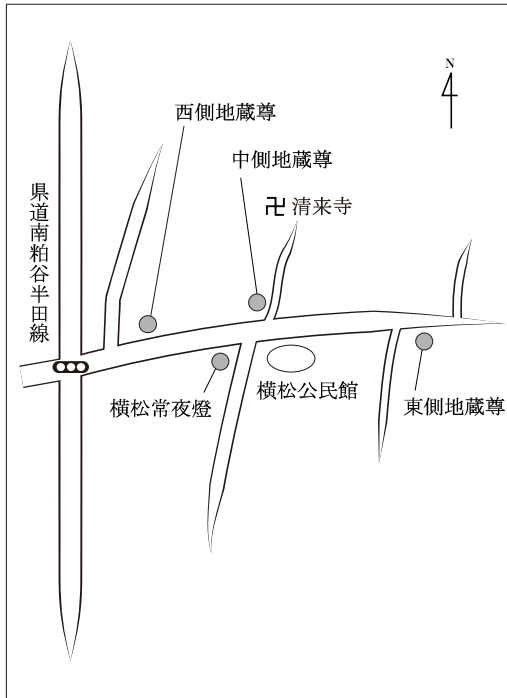


シリーズ

阿久比を歩く ⑨⑥



“子安地藏”が安置されるお堂

町の石造物が『阿久比の石造物』（昭和五十三年、町文化財調査委員会編集）にまとめられている。今回からこの調査報告を参考に、石造物巡りをすることにした。

本編では町内を六カ所のコースに分けて石造物が紹介されている。まずは「横松・萩・宮津コース」に出かけた。

県道南粕谷半田線の横松交差点南の信号を東に向かい、横松公民館手

石造物を巡る（横松・萩・宮津コース⑦）

あぐいぶらり旅

前の道を南へ少し進んだところに、「横松常夜燈」がある。

常夜燈は街路灯のない時代に、一晩中灯を付けて通行人の灯台の役割を果たした。この常夜燈もかつては、「村人」が毎晩交代で菜種油の補給をして明かりをとし、「村内安全」を願っていた。現在でも電気がつながら、夕方には明かりがともるようになっていた。

常夜燈は、高さが約二メートルもある立派な灯籠。中央のくびれた部分に「天保四癸巳正月吉日」と刻まれた文字がはきりと分かる。江戸時代末期から人々の生活を見守ってきた。常夜燈横にある倉庫で作業する女性「毎日朝と夕の二回、必ず手を合わせにくる夫婦がいますよ」と教えてくれた。ほほ笑ましい話を聞き、私と友人は常夜燈に向かい手を合わせる。

次に「横松東側地藏尊」を探す。横松公民館前を通り、東側に進む。「この時期、目がかゆくて、くしゃみが出て体調悪いよ。君はどう？」

と私の問い掛けに「花粉症なんですか？」「ええ。・・・」。友人との付き合いも長く、毎年この話題をしているのに、本当に私が花粉症であることが分かっていないのだろうか。

かゆい目を友人に向ける。

横松交差点南の信号を東に進んでから二つの地藏尊を見つけた。横松地区には三つの地藏尊がある。それぞれ「西側・中側・東側地藏尊」と呼ぶ。お堂の中には地藏を安置。花や水が供えられ、人々に大事にされている。

「東側地藏尊」の前に立つ。天保年間に横松村住人がわが子の安産などを祈願して造った「子安地藏」であると伝えられる。昭和五十一年の豪雨でお堂が壊れるなど、安置場所が点々とし、現在は道路脇一画の小さなお堂に納まる。

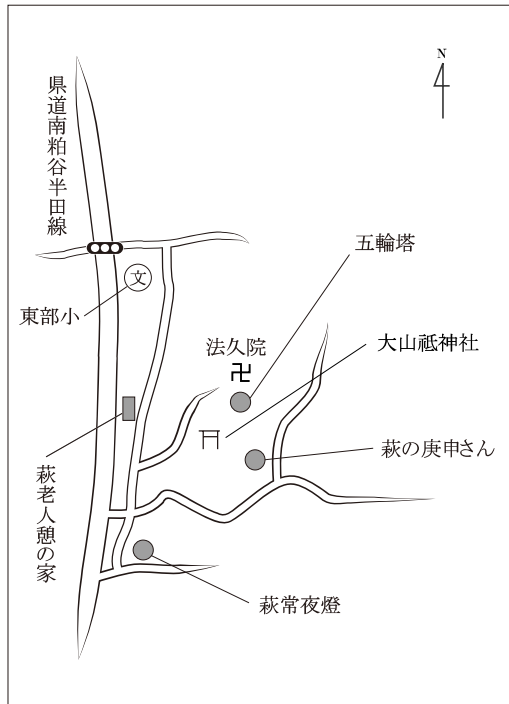
小さな地藏は目下がり、口元が緩む。穏やかな顔だ。地元では「眼病平癒」に効く地藏とも言われているようだ。「かゆい目が治りますように」と私は願い、友人は「子宝に恵まれますように」と二人で声を出して願った。ご利益を期待して、次に向かった。



横松常夜燈

シリーズ

阿久比を歩く⑨



五輪塔の中央に「三つ葉葵の紋」

「萩常夜燈」へ行く。県道南粕谷半田線沿いのガソリンスタンド近くの一角に建つ。
萩地区の寄付者により、大正五年一月に造られた。土台の部分に石が積み上げられ、見上げるほど立ちの高い灯籠。
伊勢神宮への献灯目的で建造された常夜燈は、伊勢の国、現在の三重県を望む方向に「伊勢大神宮」と刻まれた文字が向けられている。灯り

石造物を巡る（横松・萩・宮津コース②）



は昭和十五年ころまで毎晩ともされていたようだ。
常夜燈のいわれを知る人がいないか探すために、細道を北へ向かう。
地蔵がまつられるお堂の前で、楽しそうに会話をする二人の女性に出会う。年齢を聞くと七十九歳と七十三歳。
「まだ私たち若いで、まっとうな取った人に聞くと、ええかもよ」嫁いで、五十年以上経つけど、詳しいことは知らんねえ。みんな待ち合わせ場所にとるけどね」。
笑うと目尻にしわが寄る、とてもチャームアップな二人に話が聞けた。
常夜燈の存在自体は薄らいでいるが目印としての役割を果たしているようだ。
次に「萩の庚申さん」に向かった。通称「萩のスカイライン」と呼ばれるカーブの多い、坂道を上り切った場所左手に二つのお堂が並ぶ。西を向いて、右に「庚申像」、左に「役行者像」が安置される。一年に一度、地元の人たちで供養されているとの

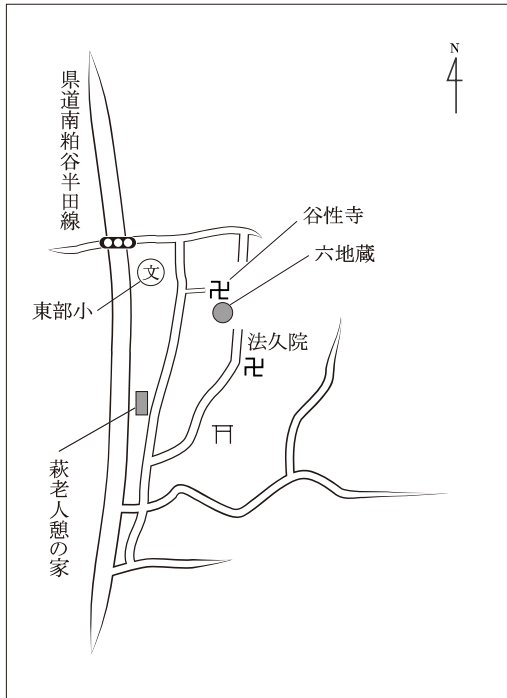
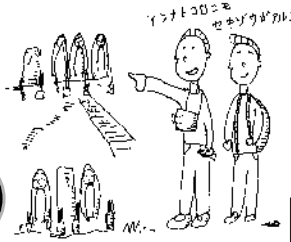


右のお堂に「庚申さん」が安置されている

こと。高台から村人を見守り続ける「庚申さん」に手を合わせる。
最後に法久院を巡った。三つ葉葵の紋が石に刻まれた「五輪塔」がある。キノコのような形をした黒石の間に白い丸石を重ね、巨大な塔となっている。三つ葉葵が二カ所確認できる。
住職の話によれば、尾張藩の菩提寺の建中寺（名古屋）から譲り受けたもので、黒石は尾張家の直系だけが使用する「伊豆石」とのこと。
『この紋所が目に入らぬか』。水戸黄門の印籠と同じ葵の御紋ですね。『頭が高い、控えおろう』。『君は助さんや格さんというよりか、うっかり八兵衛だろ』。『そう言われると自分も思いましたよ』。
次回につづく。

シリーズ

阿久比を歩く ⑨



「享保」と刻まれた文字

町内最大であるといわれる「六地藏」がまつられる谷性寺へ行く。境内の桜は三部咲き。開花時期は例年に比べると少し早かったが、三月の終わりに寒い日が続き、つぼみの期間が長い。清掃作業をする若い和尚さんに六地藏の場所を尋ね、案内してもらおう。釈迦如来の石造物が中央に立ち、左右に三体ずつ、高さ約一メートルの計六体の地蔵が並ぶ。雨風に長い年月さら

石造物を巡る(横松・萩・宮津コース③)

あぐいぶらり旅

されたせいか、地蔵の姿はかなり風化が進む。それでも地蔵の表情は笑った顔や怒った顔に見え、それぞれ違う顔をしているのが分かる。「お墓参りの後に、おばあさんたちが一体一体ていねいに拝んでみえますよ」と和尚さんがほほ笑む。

地蔵といえは『かさじぞう』の昔話を思い出す。

「貧しい老夫婦が笠を売り、お金に換えて正月のもちを買おうと、おじいさんは五つの笠を持ってまちへ出掛ける。途中で雪に降られ、村はずれで頭や肩に雪の降り積もる六体の「お地蔵さん」に遭遇。寒くて可愛そうに思ったおじいさんは五つの笠と、自分のかぶっていた笠をお地蔵さんにかぶせ、もちも買わずに家に帰る。「いいことをした」と二人で喜ぶ。その夜お地蔵さんたちが、お礼にと正月用のごちそうを届けにやってくる。」

友人と「かさじぞう」の話で盛り上がる。「貧しくても、温かい心をいつも



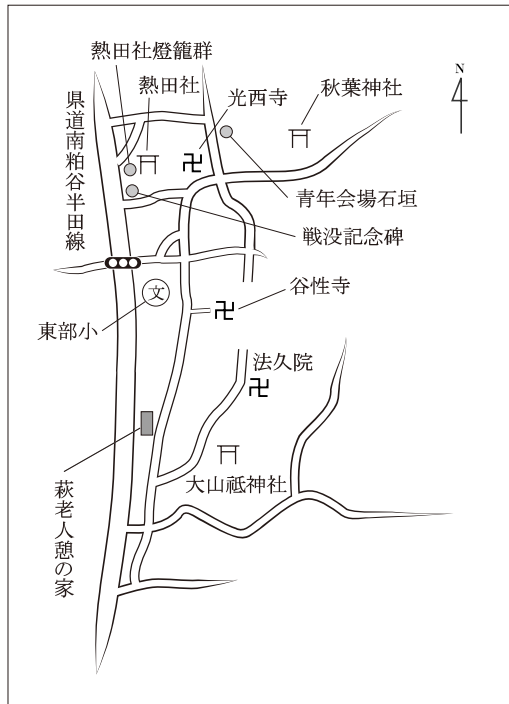
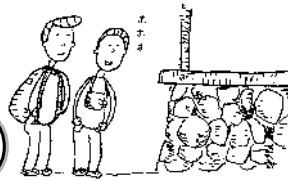
谷性寺境内に並ぶ 六地藏

持ち続けることは大切なことですね。おじいさんとおばあさんの純粋な気持ちを見習いたいです。二人はお酒を飲んで若返るんでしたよね」と友人が聞いてくるので、私はええ。それは別の話じゃないの」と返す。境内東の丘陵地には墓地が立ち並び、石が積み重なった墓石のほかに小さな地蔵が所々に見られ、「享保」「天保」の年代の文字が刻まれる。江戸時代からこの地を見つめてきた石造物がとて多い場所だ。

「僕らもおじぞうさんに、何かしてあげることはないですかね」と友人が言う。「君は下心がみえみえだからなあ」「そんなことないですよ。(笑)」。静かに手を合わせ、境内を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く⑨



11基並ぶ 燈籠”

石造物を求めて、宮津熱田社へ行く。少し動けば汗が出るような暖かさ。桜も花が散り、葉桜となり新緑がまぶしい。

境内外の一角に「戦没記念碑」が建つ。表面には、陸軍大将桂太郎書、裏面には「明治廿七、八年戦役従軍者 十名」と刻まれる。日清戦争で亡くなった人々がしのばれている。

記念碑の台石が宮津公民館西にある二子塚古墳（町指定文化財）石棺

石造物を巡る（横松・萩・宮津コース④）



のふたであるといえられる。文書で書かれた正式な記録はないが、本当にこれが事実であるならば、大事な石棺のふたがなぜ台石に使われたのか、何か謎がありそうだ。隠された秘密がありそうな、ミステリアスな話でワクワクしますよ」と友人が言う。「確かにそうだよ」と私が返す。しばらく聞き込みを続けたが、謎は解けない。残念。謎はまたの機会に調べることにして、熱田社境内へと進む。拝殿の左右に天然記念物の楠（町指定文化財）が二本生い茂る。西側前方に目を向けると十一基の燈籠が等間隔に並ぶ。

文化財調査報告書には「熱田社燈籠群」として紹介される。所々にコケが生え、古い燈籠であることが一目で分かる。下の支柱部分に今からおよそ三百年前の江戸時代「元禄」の元号が刻まれている。

いわれなどを尋ねてみたが、存在すら知らない人がほとんどだ。唯一「元禄燈籠」と呼ばれていることが分かった。薄暗い場所にある燈籠群

だが、西から差し込む日を受けて、十一基の燈籠が明るく照らし出された姿は幻想的だ。

今回のコースの最後に「青年会場石垣」を見た。宮津地区の青年会場の基礎には、江戸時代後期から石垣が積まれている。

建物の屋根瓦の最上部に「若」と文字が見える。長老は言う「この建物は『若い衆蔵』と呼ぶ方が、むしろにはなじみがある。祭礼の前になると囃子を覚える場所、昔は若いもんが、先輩からいろいろなことを教わる『修行の場』でもあったんだ」。

今年も春祭りが行われ、青年会場の前に二台の山車が並び、若い衆の威勢のいい声が響き渡った。「石垣」は時代が移っても変わることのない、祭りのにぎやかな光景を静かに見守り続けていた。



青年会場の基礎になっている「石垣」

シリーズ

阿久比を歩く ①



“新畑の庚申さん”

今回からは、町文化財調査報告書『阿久比の石造物』の板山・福住・白沢コースを巡る。
最初に「新畑の庚申さん」を探す。報告書が示す地図を参考に歩く。途中、舗装された道がなくなり、田畑のあぜ道を進む。「あそこに何かが」。友人が急に声を上げる。小高い丘に、伸びた草で隠れるように屋根のある小さな建物を発見。
三方をレンガで積んだ小屋の中に、

石造物を巡る(板山・福住・白沢コース⑦)

あぐいぶらり旅

「庚申さん」が安置されている「圃場を整備するときに、ユニボ（油圧シヨベル）で庚申さんを動かそうとしたら、キャタピラが切れてしまったんだよ。勝手に動かさないとほし」という庚申さんの抵抗だ。たかもしれないね。畑で作業をする男性に「庚申さん」の逸話が聞けた。さい銭や手作りのお守りが供えられ、今も大切にされている様子がうかがえる。
ふれあいの森を右手に東へ向かう。四つ角の片隅で、小さな地蔵を見つけた。写真で紹介されている形からすると「クヨバ地蔵尊」に間違いはない。「右みやつ道」「左乙川みち」と地蔵の側面に刻まれているようだが、石の風化が激しく確認できない。
近くの民家を訪ねる。一軒目は留守、二件目で八十四歳のおばあさんに会えた。「昔はあの辺りは山で、半田市の乙川と宮津へ行く道を教えてくれるお地蔵さんだよ」。私たちが何も説明していないのに、おばあさんは「道しるべ」であることを教える。

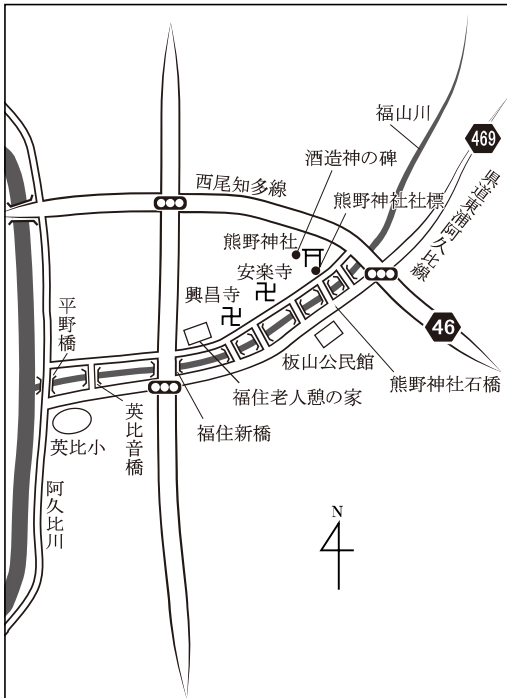
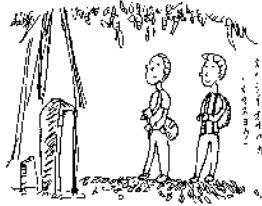
出会った人に尋ねながら「地獄谷地蔵尊」にたどり着く。位置が移動し、現在は板山地区の地獄谷にはなく、JAあいち知多のカントリーエレベーターと運送会社間の道を少し北へ歩いた場所の一角に、地蔵は静かに身を寄せる。
地蔵前の石を拾い、その石でいぼをなでると取れるいわれがあるらしい。「いぼじゃないけど、今日はどの調子が悪いからのどにしようよ」と、私は石でのをなでる。友人は「最近、抜け毛が多いから頭にします」と頭をなでる。石を置き、手を合わせて地蔵を後にする。



“地獄谷地蔵尊”

シリーズ

阿久比を歩く ⑩



熊野神社入り口に立つ 社標”

友人と二人で板山地区の熊野神社を訪れた。文化財調査報告ではこの神社からは三つの石造物が紹介されている。順番に見ていくことにする。道路と境内の間を流れる福山川に架かるのが「熊野神社石橋」である。調査報告では「町内の神社仏閣で、石橋のあるのは当社と西隣の安楽寺だけである」と解説される。

『阿久比町誌資料編四』によれば板山郷土史の中に「石橋架設 于時

石造物を巡る(板山・福住・白沢コース②)



明治三十六年四月」と記録が残されている。現在の石橋は河川改修に伴い川幅が広がり、昭和五十四年三月に完成したものだ。

幅約二・七メートル、全長約七・五メートル、下部にコンクリート、上部に石が敷かれた二重構造。改修前から石橋として使われていた御影石が敷き詰められている。

「この橋、渡るべからず」と立て札があつたら、君はどうやって神社へ行きますか？」と友人に問い掛ける。しばらく考えた後友人は、東へ少し歩いた場所に架かる、コンクリートの橋を渡り始める。大きな声で「この橋を渡り、川沿いの細道を歩けば神社に着きますよ。どうですか」と友人は私に手を振る。「そうだね・・・」。確かに間違いない。私は、橋と端を掛けて、橋の端の部分を通らず、真ん中を渡るだろうと期待していたが、さすが友人。裏切らず笑わせてくれる。

私は石橋の真ん中を渡り、友人の待つ「熊野神社社標」の前に進む。

高き約三メートル、正面に「村社熊野神社」、正面左には「熱田神宮宮司正五位角田忠行書 明治四十一年四月建之」と記される。角田忠行氏は幕末の勤王の志士の一人で、島崎藤村の小説『夜明け前』の登場人物、暮田正香のモデルであるといわれる。

角田氏を明治三十四年に熊野神社に招いた記録が残る。社標の文字を書いたのはそのゆえだろうか。

最後に「酒造神の碑」を見た。酒造神の松尾皇太神がまつられる。境内北の小高い場所にひっそりと立つ、うっそうと木が生い茂る森の中だが、木漏れ日が石碑を照らす。

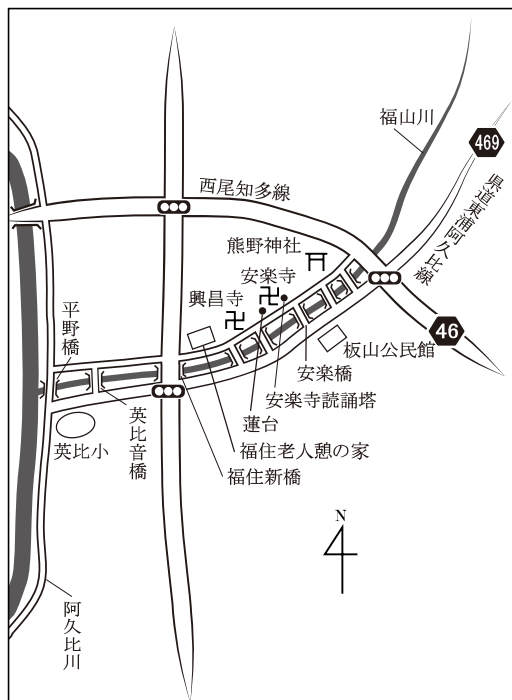
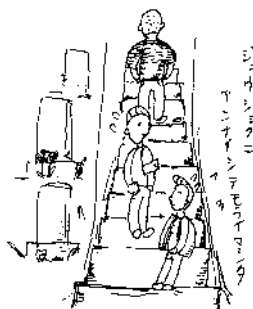
農閑期に「社氏」として酒造りに出掛けていた時代、この碑に健康などを願い、各地へ出掛けていったようだ。「健康」といえば、酒の神様なので「痛風」にならないようにと願ったかどうか」と友人に言われたので、私は素直に手を合わせた。



福山川に架かる「石橋」

シリーズ

阿久比を歩く ⑩



山門下にある“読誦塔”

友人と二人で石造物を探しに板山地区の安楽寺へ出掛けた。初夏の日差しを浴びながら福山川に架かる安楽橋を渡る。少し歩いただけで汗が出る。大きな山門で日陰ができる。しばらく涼しい場所で川の流れを見ながら休む。

寺の住職に話が聞けた。安楽寺読誦塔」と「蓮台」を案内してもらう。山門右下の石垣の前に読誦塔が立つ。台座の上には、赤い帽子と前掛

石造物を巡る(板山・福住・白沢コース③)

あぐいぶらり旅

けで着飾られた釈迦如来像が座る。お釈迦さまは、軽く組んだ両手を膝の上に寄せ、目を閉じて瞑想にふける。顔の表情は実に優しい。調査報告書の解説によれば、享保二十(一七三五)年の建立。台座の正面には「奉」「讀」「誦」の文字が読み取れる。

読誦とは経文を声に出して読んだり、そらで読んだりすることを意味する。経文をたくさん読んだ功績を釈迦如来像に残そうと奉納された石造物のようだ。

「僕は、小学生のころから毎週かかさずマンガを買って読んでます。この継続性すごいと思いませんか。マンガを読む自分の姿の石造を作るうかな」と友人が自慢げに話す。

「・・・」。何もしゃべらない釈迦如来の目尻が下がったような気がした。次に延宝四(一六七六)年に作られた蓮台を探しに行く。住職もどこにあるのでしょうか」と首をかしげる。私たちと一緒に境内の裏山の墓地を探してくれることになった。

蓮台は、棺(くわん)へ亡くなった人を入れて葬る箱を置く場所と説明がある。火葬ではなく土葬が行われていた時代は、棺を自宅から墓地まで運び、蓮台の上に載せて葬儀が行われていたとのこと。

「ここが葬儀場跡だから、あるとすればこの辺りだと思えますよ」と案内してくれたが見つからない。半ばあきらめかけていると「蓮台というのは、本来仏像が乗っているハスの花の形をした台座だから、もしかすると・・・あれじゃないですか」と住職が崖を利用して造られた墓地の上に立つ観音像の下を指差す。

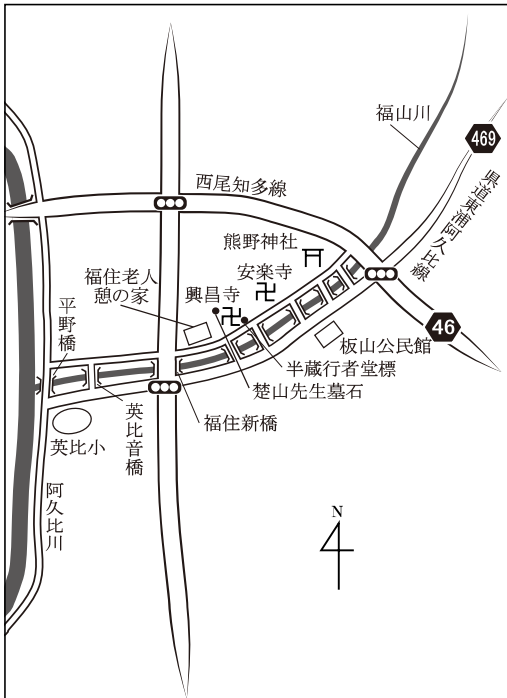
観音像の一番下に敷かれた石は、丸みを帯び、端の部分は花びらをイメージする形になっている。記されている文字は確認できないが、形や風化した状態から、探していた「蓮台」に間違いはない。

少し重い意味を持つ石造物であったが、「蓮台」の本来の姿で、現存することが分かってよかったです。住職の一言でその場が和んだ。



観音像の一番下が「蓮台」

シリーズ 阿久比を歩く ⑩



半蔵行者堂横に立つ 半蔵行者堂標

いつもの「相棒」友人と二人で福住地区の興昌寺へ、「半蔵行者堂標」と「楚山先生墓石」を探しに出掛けた。

興昌寺山門下の西側の一角に、岡戸半蔵をまつる行者堂があり、その右横に「半蔵行者堂標」が立つ。

岡戸半蔵は福住出身で、知多四国八十八カ所霊場を開いた一人である。阿久比風土記の会が編集した『知多四国開創 阿久比出身岡戸半蔵』に

石造物を巡る(板山・福住・白沢コース④)



よれば、半蔵は明治三十六年福住荒古に造られた阿弥陀堂でまつられていた。阿弥陀堂は昭和三十年ころ、東部線の拡張により取り壊されることになり、知多四国十四番札所で縁の深い興昌寺の山門西側に「半蔵行者堂」として再建される。堂標もそのときに現在の場所に移動したようだ。

堂標は高さが約一丈。風化がひどく、頂の突起が削れて四角柱となっている。『明治四十四年三月』と記された文字が読み取れる。

「四角柱の面積の求め方覚えてる?」。私からの突然の質問に友人は、「底面積×高さで求めますよ」。自信満々に答える。「さすがだね」とほめる。「テレビのクイズ番組に、この手の問題がよく出るのよ、妻に僕の頭の良さを認識させるため、こっそり勉強してるんですよ」。「じゃあ、球の面積は?」「台形の面積はばかりなんですけど。昨日の夜、早く寝てしまつて・・・」。この言い訳を岡戸半蔵はどう思うだろうか。

境内を通り、西側の墓地へ進む。「故大村福三郎楚山先生墓」の文字が目立つ大きな墓石を発見。

「大村福三郎楚山」(一八四三〜一九〇七)。文化財調査報告書では、尾張藩校明倫堂最後の教授で福住出身と解説される。墓は明治四十一年、親戚や門人により建立。

藩校は江戸時代、藩が経営した藩士の教育を目的とする教育機関。明倫堂の初代督学(校長)は東海市出身の儒学者細井平洲。思わぬことがつながっているものだ。明倫堂で学んだお侍さんたちは、球の面積は求められるでしょうかね。「名門明倫堂だよ。地球の面積まで暗記していると思うよ」。

帰り際、半蔵行者堂に手を合わす高齢の女性を見掛ける。甚目寺町から知多四国参りに家族で来たとのこと。私たち二人も並んで手を合わせよう。雲行きが怪しく、雨が降りそうになってきたので家路を急いだ。

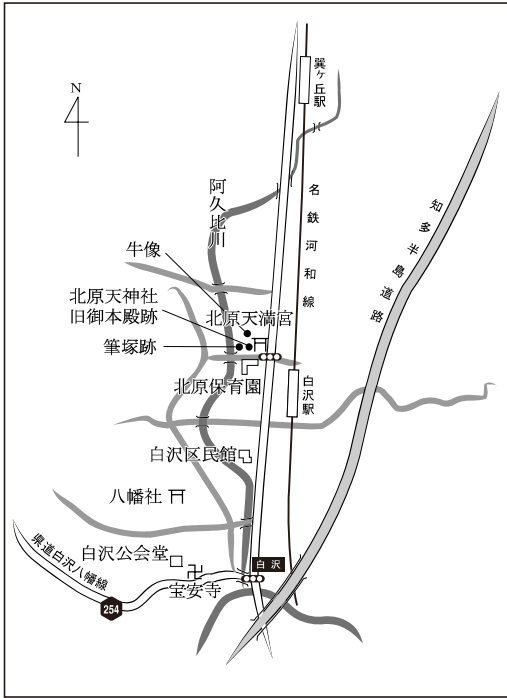


墓地の中でひときわ目立つ 楚山先生墓石

シリーズ

阿久比を歩く ⑩

ジガウマウ ナリマスラウニ



“天神”の神使「牛像」

白沢地区を巡った。北原天満宮に行き、「北原天神社旧御本殿跡」筆塚跡、「牛像」の石造物を見た。境内に入つてすぐ左の方に「北原天神社旧御本殿跡」と「筆塚跡」の石碑が建ち、奥に進んだ本殿右前に「牛像」が置かれる。阿久比の郷を開いたといわれる、菅原道真公の孫「英比磨」。北原天神社は、天曆九（九五五）年英比磨の住居跡に建てられたとされる。明治

石造物を巡る（板山・福佳・白沢コース⑤）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

十一年、別の場所にある白沢八幡社に合祀。北原天神社旧御本殿跡の石碑は、昭和八年に神社の旧跡地を記念して建てられる。その後昭和六十二年、地元の氏子らの手によって、旧跡地に本殿再建築が実現し、現在の北原天満宮となる。北原天満宮は、菅原道真公がまつられる。道真公は「学問の神様」で知られる。江戸時代後期から明治時代初期にかけて、子どもたちは寺子屋で「読み・書き・そろばん」を学んだ。道真公にあやかうと、寺子屋で学んだ子どもたちは使い古した筆を神社に献上して、習字の上達祈願をしたらしい。筆塚は筆を埋めた供養所。 「僕は字が下手なんだよね。子どもたちに、字はていねいに書きなさいと言っただけで、自分の書く字が下手だから説得力がないんだよね。」友人は「職場の机の上にメモが乗ってましたけど、読むのに苦労しましたよ」と笑みを浮かべながら話す。

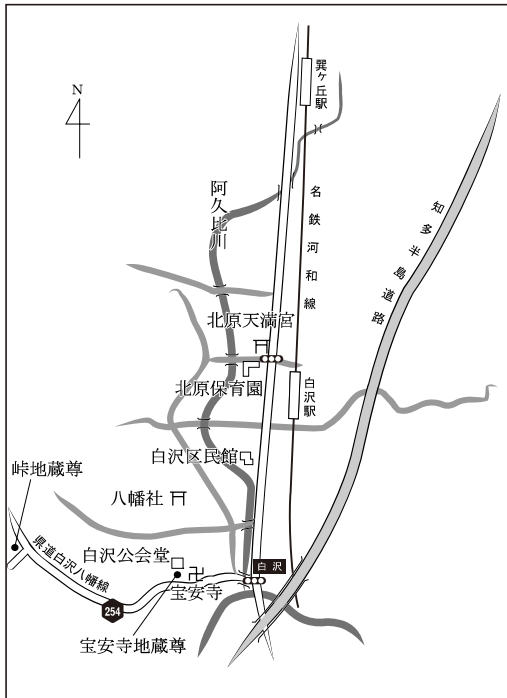
「これから字はていねいに書くよ。」大人げなくむきになって道真公の前で誓う。 「牛像」の前に進む。なで牛は「天神」の神使。牛をやさしくなでながら心を込めて願いごとをすると「利益がある」と言われる。半年過ぎて忘れかけているが、今年の干支は「丑」。いつもの年よりも多くの人が願いごとをしたことだろう。私たちも牛をなでながら「……」境内をぶらぶらしていると、どこかで見た顔が近づいてくる。職場の後輩だ。「うわさの『ぶらり旅』ですか。」そうだよ。どうして「ここに？」 「目の前の病院で子どもが生まれまして。二人の姿が見えたので。」 「それはおめでどう。ここは学問の神様がまつられているから、生まれてきた子が賢くなるように祈るといいかもよ。」思わぬ朗報。牛像の前に戻り、生まれてきた子のために三人で牛をなでた。



「筆塚跡」の石碑

シリーズ

阿久比を歩く ⑩5



通称「抱き地蔵」と呼ばれる 峠地蔵尊

白沢地区宝安寺の「地蔵尊」と峠の「地蔵尊」を探しに出掛けた。子どもたちは夏休みに入っただが、「梅雨明け宣言」はまだない。今日もはつきりしない天気。どんよりとした曇り空で蒸し暑い。宝安寺を訪ねると、本堂を建て直し中で、境内は「トントントン」と勢いのある金づちの音が響く。西側にそろいの赤い前掛けをした十体の石造が並ぶ。その中に「地蔵尊」が

石造物を巡る(板山・福住・白沢コース⑥)



交じる。文化財調査報告によれば、「地蔵尊」には、へ右 半田 もろさき、へ左 ありわけ 亀さき」と記され、道路改修の際に宝安寺境内に集められたもので、元の安置場所は不明。地蔵の両脇には道を示す文字が読み取れる。道ばたに置かれた地蔵尊を「辻地蔵」と呼び、道しるべの役割を果たす。優しい顔の表情が印象的だ。道先案内役を終えた安堵感だらうか、静かに世の中を眺める。宝安寺を後にして、峠の「地蔵尊」を目指す。別れ道の一角の小さな堂に「地蔵尊」がまつられる。民家を訪ねて地蔵尊にまつわる話を聞く。その昔、峠に休憩する茶屋があり、その場所に「辻地蔵」として置かれていた。時代が流れ、道しるべとしての役割を果たさなくなると地蔵はないがしろにされる。地元で不幸なことが続いたときに、刈谷市へ嫁いだおばあさんから「草むらで眠る地蔵さん」を大事にしたらどうだろう」と助言を受ける。堂の中に安置

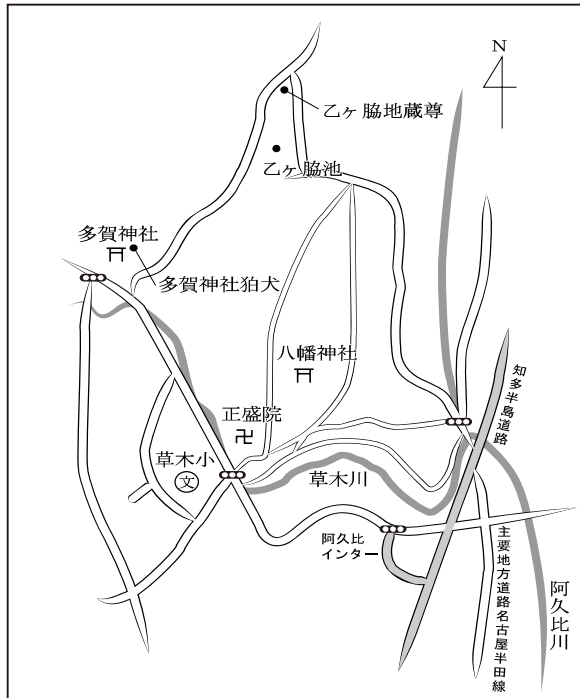
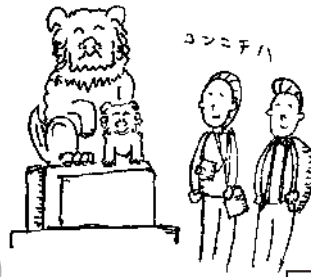
して、みんなが手を合わせるようになってから、不幸が不思議と起こらなくなったという。現在近くに住む七件の家が順番で地蔵尊の世話をする。八月と二月の年に二回「地蔵祭り」を開き、祭り当日には団子やお菓子を供えて、お年寄りや子どもたちが念仏を唱える。地元の人は、通称「抱き地蔵」とも呼ぶ。願いごとをするときに地蔵を抱き、「軽い」と思った場合には願いごとがかなうらしい。「子どもが病気をしたときは、お地蔵さん」を抱かせます。不思議と治るんですよ」と女性が笑顔で話す。今まで不思議そうに話を聞いていた友人に「君もお地蔵さん抱かせてもらえば」と私が言うと、「もし願いごとをして重かったら、怖いのでやめときます。科学では証明できないことが本当にあるんですね」と首をかしげる。梅雨明けはまだだろうか。雨が降り出してきた。



宝安寺西側に安置される 地蔵尊

シリーズ

阿久比を歩く ⑩



口を開けた 狛犬

今回から草木地区の石造を巡る。梅雨もなかなか明けずに、蒸し暑さと湿気でじめじめした日が続く。鳴くセミもどこことなく元気がない。「乙ヶ脇地蔵尊」を探するために、阿久比町と知多市の境界を進む。しばらく道なりに行った場所です。小さなお堂を発見。三方をトタン板に囲まれた簡易なお堂の中に「地蔵尊」が安

石造物を巡る(草ホコース⑦)

あぐいぶらり旅

置される。

地蔵の胴体は、布の前掛けで着飾れる。失礼して前掛けの下を見る。「右おの道 左くさぎ道」の文字が両脇にそれぞれ刻まれているのを確認。文化財調査報告では、「草木鶴若に至る山道の三差路にあり、正盛院裏の山の背より草木部落中央におりる昔の道の辻地蔵である」と解説。地蔵の周りは雑木林で薄暗い。雨上がりで足元はぬかるみ、ぐちゃぐちゃ。小さなカエルがピョンピョン飛び跳ねる。私たちの耳元では、「ブーン、ブーン」とやぶ蚊がいやな音を響かせる。

わずかな時間で私は首筋、友人はひじをやぶ蚊に刺された。「お地蔵さんはやぶ蚊に刺されなくていいよなあ」「やっぱりそう思いますか?」「このままここにいますか?」大変なことになるので、来た道を戻る。次に多賀神社を訪れ、「狛犬」を見る。社前の一対の狛犬は昭和五年、草木地区の初老者が厄年記念に寄進したもの。狛犬が置かれる台座の裏



道しるべの役割を果たした 乙ヶ脇地蔵尊

側には、寄進者九人の名前が刻まれる。

狛犬は神社前などに置かれる、獅子に似た獣の像。魔よけの役割を果たし、向かい合わせに口を開いた狛犬と口を閉じた狛犬の阿味あうんの一対で置かれるようだ。

拝殿に向かって右の狛犬は大きく口を開き、鞠(まり)の上に左足を乗せ、左の狛犬は口を閉じ前方に子どもを従える。

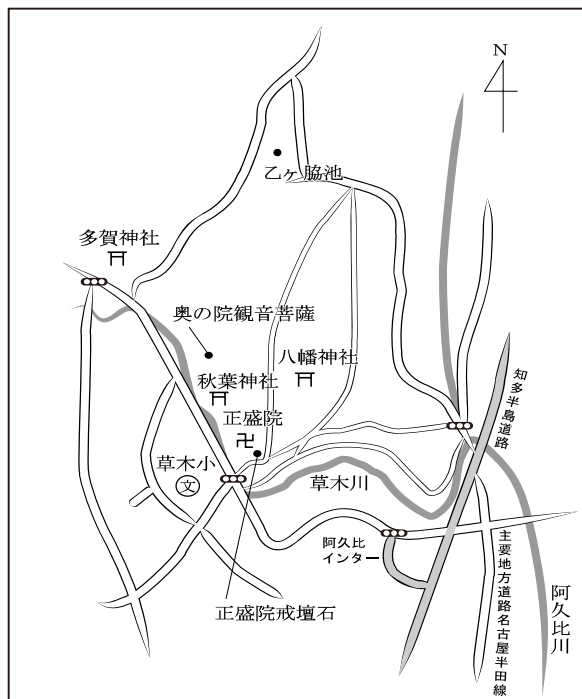
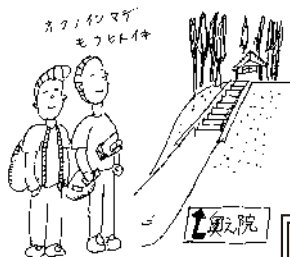
多賀神社と厄年は縁が深い。知多半島で厄年を迎えた人の多くは、彦根の「多賀大社」(滋賀県)へ厄払いに出掛けると聞く。例外にもれず昨年私も同年者と出掛けた。

いづつから、この地方の人々が滋賀県まで厄払いに行くようになってたのだろうか。年配の方に聞いてもはっきりとした答はない。

「皆さん怖い奥さんから一日だけ開放されるために行くんじゃないですか?」と友人がにやけて言う。「.....」。心なしか陰い顔の狛犬の表情が緩んだような気がした。

シリーズ

阿久比を歩く ⑩



正盛院山門前に建つ 戒壇石

草木地区の正盛院を友人と二人で訪れた。盆も過ぎ、朝晩は涼しくなりましたが、日中は残暑が厳しい「シャカ、シャカ、シャカ」とセミの声が響く。参道を上て行くと、山門手前石横に私たちよりも背丈の高い石が三段に積まれる。上部の長い、がっしりとした石柱に「山門禁葷酒」と刻まれる。文化財調査報告では「正盛院戒壇

石造物を巡る(草ホコース②)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

石として紹介。

戒壇とは、僧に戒めを授けるために築いた場所。鑑真、奈良時代来日した唐の学僧。日本の律宗の祖が奈良の東大寺に設置したのが最初であるといわれる。律宗や禅宗寺院の門前に建てられた石柱を、戒壇石と呼ぶ。突然、寺を訪ねたが住職が早く、戒壇石の話聞かせてくれた。なぜ「山門禁葷酒」と刻まれているか尋ねる。

「葷酒の葷はネギやニンニクのようなおいのくさい野菜を意味します。食べた後、口の中でおいが残る食べ物。相手には不快な思いをさせるでしょ。寺の僧は、あなたたちみたいに訪ねて来る人としやべるのもお勤めの一つです。お酒の飲み過ぎは心を乱します。だから葷酒は寺の山門より奥に持ち込まないようにしたんです」

冷たいお茶を「ちそうになり、境内を離れる。セミの声は騒がしい。日差しもきつい。さきほど飲んだお茶も、あという間に汗に変わる。「ここに来る前に、昨日の夜、中華

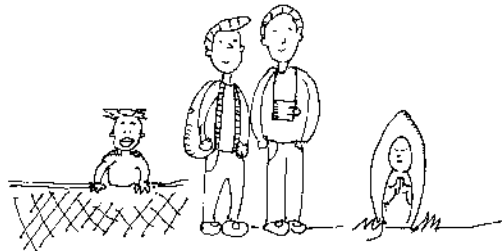


中央が奥の院の観音菩薩

料理食べて、ビールを飲んだって言うてましたよね、山門くぐってもよかったんですか」と友人が言う。「寝る前と朝、しっかり歯を磨いたから大丈夫。うがい薬で念入りにうがいもしたから完璧だよ」「さすがですね」「ほめられることじゃないけどね」。

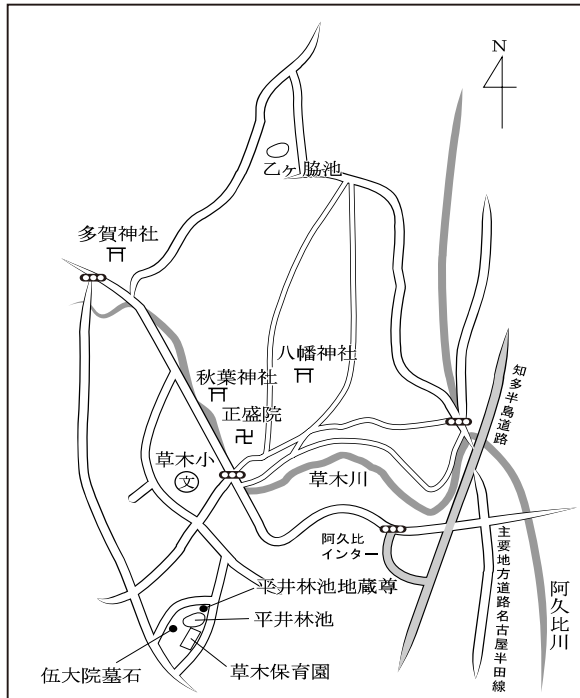
「奥之院」の矢印に沿って「秋葉神社奥の院観音菩薩」を探す。うそうと木が生い茂る、薄暗い場所。観音菩薩を発見。コンクリートブロックで造られた小さなお堂の中に「観音菩薩」は安置される。

住職の話によれば、別の場所ですの中に埋まっていた菩薩像を地元の人が見つけ、秋葉神社奥の院に移してまつたらしい。今も供養花は絶えないとのこと。顔の表情は穏やかだ。手を合わせ、奥の院を後にする。周辺の墓地には、盆に供えられた、オレンジ色のホオズキがよく目立つ。お墓にピーマン供えるんですか?。友人はホオズキを知らなかった。



シリーズ

阿久比を歩く ⑩



平井林池を見つめる「地蔵尊」

草木コースの最後は、伍大院墓石と「平井林池地蔵尊」を探しに出掛けた。

伍大院墓石は、平池地内の小高い場所の竹林に一基だけひっそりと置かれる。一メートルほどの高さの墓石で、中央に大きく「伍大院墓」と刻まれる。墓石の向かい、北側には「本宮山」がまつられている。

石造物を巡る(草ホコース③)

あぐいぶらり旅

調査報告書では、寛永、正保、慶安(江戸時代)ごろの大峰山修験者が生身成仏した場所だと解説される。

近くで孫と楽しそうに遊ぶ夫婦に話し掛ける。墓石のことについて尋ねると『ぶらり旅』でしょ。今は石造物を巡っているんだよね、いつも読ませてもらってるよ』と、うれしい言葉を掛けてもらう。

疫病が村ではやる。「伍大院」が、病気の人々に代わり苦しみを受けるため、自ら生き埋めとなり、命を絶つ。その後村人の疫病が治まったという話が伝わる。

毎月二十一日は、この辺りに住む人々で当番を決めて、花などを供えることが続けられる。毎年九月二十一日は、近所の人があつた場所が集まります。子どものころは、各家庭が重箱にごちそうを詰めて持ち寄り、食べたり飲んだりして、ちよつとしたお祭りでしたよ』と夫婦は振り返る。

自らの命を村人のためにささげた「伍大院」。伍大院が村人を救った功

績をたたえる慣習は、今も人々の信仰として続く。

平井林池に着く。平井林池地蔵尊は池の堤から少し離れた場所の一角に置かれ、池を見つめる。

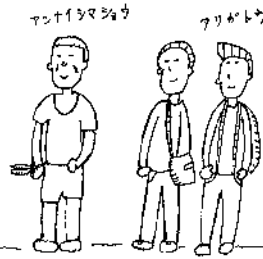
池を築いたときの犠牲者の冥福や村人の安全を祈願するため、宝暦四年に造られた地蔵だ。

池の近くに草木保育園がある。この池には河童がいて、毎年子どもたちが『お化け大会』に招待するみたいだよ。仕事で来たときに知ったんだけどね』と私が友人に話す。河童ですか?。『勇気を出して『おばけめいろ』を通り抜けた子には、出口近くで待つ河童からプレゼントがもらえるらしいんだよね。子どもたちがプレゼントもらって喜んでる姿を見たよ。『河童は見なかったんですか?。ううん。勇気がないから外で待ってた。』そうですか。』。

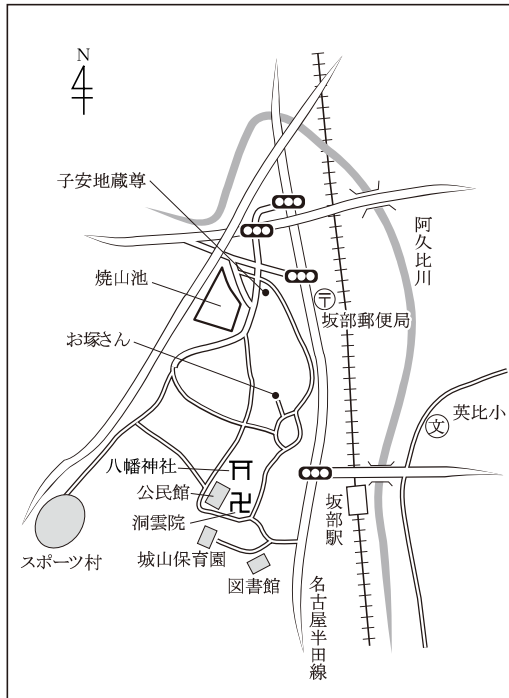
地蔵尊は河童の存在を信じている園児たちの通園を、毎日見守っている。



竹林の中にある「伍大院墓石」



シリーズ 阿久比を歩く ⑩



幼子を抱く“子安地藏尊”

坂部・卯之山コースの初回は、「子安地藏尊」と「お塚さん」の二つの石造物を探しに出掛けた。
文化財調査報告の地図では、子安地藏尊のある場所が阿久比坂部郵便局付近に示されているので周辺を探す。
細い坂道を上る途中、民家の庭で草取りをする男性を見掛け、声を掛ける。事情を説明すると、「この道を進んで、左へ曲がったところにいるお

あぐいぶらり旅 石造物を巡る(坂部・卯之山コース⑦)

地蔵さんのことかなあ?」手を休め、親切に地蔵が置かれる場所まで案内してくれる。
瓦ぶきで、板壁の立派なお堂に、地蔵が安置される。格子越しに地蔵を眺める。地蔵は静かに目を閉じる。赤い布で覆われた胴体の一部から、鞠のようなものを抱きかかえる幼子の姿が見える。その子を地蔵は抱く。
家を見ながら、「あそこのおばあさんがよく世話をしているから聞いてみる」といいよ」と教えられ、男性と別れておばあさんを訪ねる。
「道路が新しくなったりして、私が知っているだけで、居場所が四回変わったよ。子どもを守ってくれる」お地蔵さんで、昔から手を合わせる人が絶えないよ」
その言葉から「子安地藏尊」であることを確信する。毎日、お茶と水を供えるおばあさん。二月と八月には近所の人が集まり、百万遍の念仏を唱えるとのこと。子どもたちの健康や幸せを祈る気持ちは、いつの時代も変わらない。

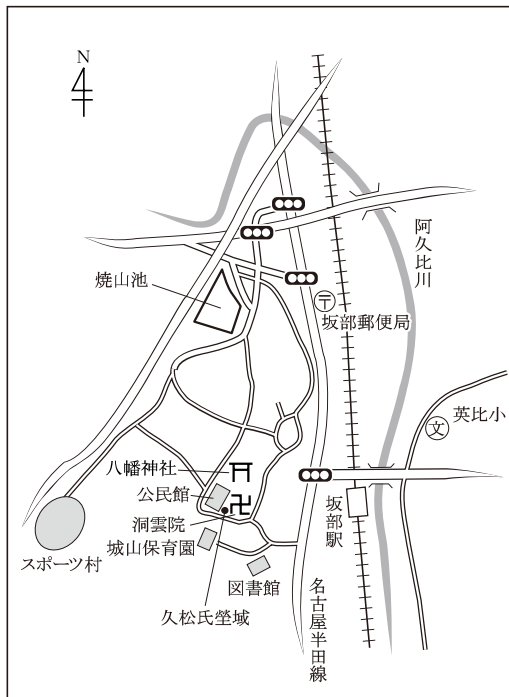
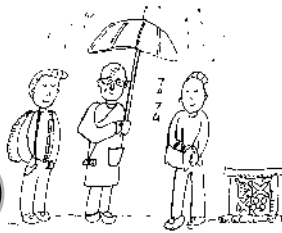
次に細道を南に向かい、東新畑地内の畑の中央に立つ「お塚さん」を見る。
野ざらしの小さな石造は、こんもりと土砂が積み上げられた塚の前に置かれる。塚は『阿久比の昔話』にも登場する人物で、月宮姫の墓であるといわれる。通称「お塚さん」と呼ばれる石造は、安政年間の開墾で塚が壊された後に安置された観音像。
十八歳で亡くなった月宮姫。とても美しい姫であつたらしく、塚に祈ると美人になれる」という伝説が残る。
「つい最近も、妊婦さんがお祈りしていたのを見掛けたよ」と近くに住む女性の話が聞けた。
友人が今日は、子宝に恵まれることと、女の子が生まれたら美人になれるようにとお祈りしたからきつと「ですよね」と含み笑いを浮かべながら私に話し掛ける。「女の子は父親に顔が似るらしいよ。君の顔からすると美人というのはどうかなあ?」と返した。



塚の前に立つ石像 お塚さん”

シリーズ

阿久比を歩く ⑪



町指定文化財 久松 松平家葬地

洞雲院周辺へ石造物を探しに友人と出掛けた。境内西の裏山にある久松氏塋域を訪れる。戦国期の阿久比を代表する久松家に関係が深い人物の墓が並び、昭和五十七年三月には久松・松平家葬地」として町指定文化財となっている場所だ。

老住職が親切に案内してくれる。「墓までの道に敷かれている石は、名古屋まで、ちんちん電車」が走っていた時代、レールの横に敷かれていた

石造物を巡る(坂部・卯之山コース②)

あぐいぶらり旅

御影石ですよ。昭和五十七年NHK大河ドラマ『徳川家康』で、阿久比の地が家康の生母於大の方が暮らした舞台として紹介された後に、訪れる人が増え、参道を整備した際のエピソードを聞かせてくれる。

まつられているのは久松定益、久松定義、久松俊勝、於大の方、松平定綱の各氏。五基の墓石は、それぞれ門扉があり、三方が石柱で囲まれた中に置かれる。江戸時代になつて整備されたらしく、於大の方と松平定綱の門扉には、三葉葵の紋が見られる。

久松定益は洞雲院の建立者。久松定義は定益の子で阿古居の館(後に阿古居城と呼ばれる)を築いたといわれる。

定義の肖像画が洞雲院に残る。定義は、室町時代の画家明兆の描いた『十六羅漢図』を三幅町指定文化財購入して、久松家の繁栄のために、羅漢供養をするほど、仏教の信仰心が深かったようだ。

久松俊勝は定義の子。阿古居城主となつた俊勝のもとへ再嫁したのは



久松家の菩提寺 洞雲院

於大の方。於大の方の墓には「遺髪」が眠る。二人の間に生まれた定勝、初代桑名藩主・初代松山藩祖の次男、松平定綱は第二代桑名藩主となつた人物で、寛政の改革を行つた松平定信は子孫にあたる。

「たくさんの人物名が出てくると、一回聞いただけでは覚えられないよね」と私が言う。友人がぶつぶつと「俊勝のおじいさんが、ええと、定益で、この人があれで」「あれで、誰?」。二人とも頭の中がパニック状態。

「定綱の遺言で、この場所に墓が設けられ、桑名藩から毎年馬に乗って二人ずつ、供養に訪れたという記録が寺に残されています。それからね……」。老住職の話に熱が入る。

「あの人は、あれだつたよね。いろいろな話を整理しながら帰途につく。

シリーズ 阿久比を歩く⑪



あぐいぶらり旅

石造物を巡る(坂部・卯之山コース③)



「虫封じ」に使われだ ひしゃく

城山公園を訪れる。公園の横には町立図書館が建つ。阿久比町文化財調査報告書では、かつて城が建っていたいわれや、久松家ゆかりの場所であることが記された「城山公園碑」、「阿久比古城跡碑」、「久松勝成公手栽松標碑」、「英比大明神」の四つの石造物が紹介される。

於大の方は徳川家康を生んだ後、天文十六(一五四七)年阿古居城主久松俊勝と再婚。桶狭間の戦いを控え

た永禄三(一五六〇)年、家康は幼くして離れ離れとなつた母に会うため、阿古居城に立ち寄り、たとえられる。

「ここで、家康と於大の方が涙した場所なんだろうね」と私が友人に話し掛ける。友人は、NHK大河ドラマ『天地人』の家康は、すごく憎たらしい人物ですよ。家康ファンの僕としては毎週テレビの前で考えさせられちゃいます」と力む。作家によつてはいろいろな描き方があるよ。いつもニヤニヤしているけど、君は意外と熱い男だなあ」と友人をなだめながら公園を後にする。

県道名古屋半田線を南へ少し行くと、虫封じ霊場碑が見えてきた。高さ二メートル、幅一メートルほどの巨大の石に「むしふうじ霊場」と記され、最勝寺を案内する石碑となつて

いる。最勝寺には、古見堂地蔵」がまつられ、地蔵にまつわる伝説が残る。

―平治二(九〇二)年、野間で殺害された源義朝の家臣「渋谷金王丸」は、主君義朝の首が京に送られるのを知



最勝寺入口を知らせる「虫封じ霊場碑」

り、首を取り返そうと京に向かうが、馬が病に倒れ進むことができない。轡を井戸で洗い、古見堂地蔵」に献じると、馬の具合が良くなり、再び京を目指す―

地蔵に祈願すると病気が平癒したいわれから、最勝寺では子どもの「かんの虫封じ」が行われる。

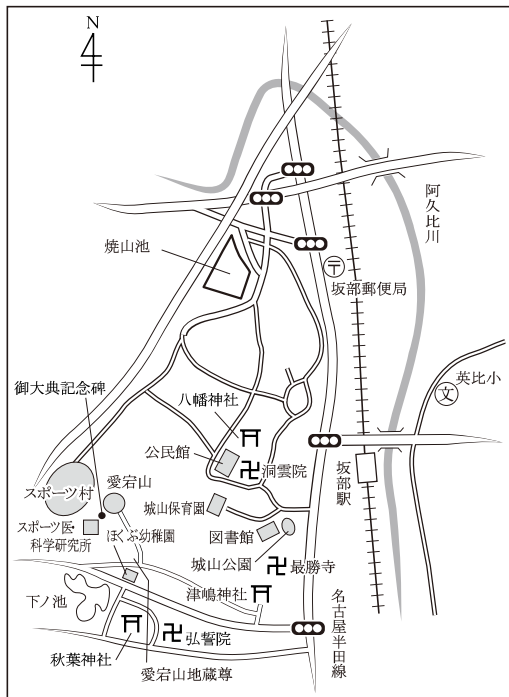
柄杓の底に「鬼」と書き、古見堂地蔵の前で祈願したものを家に持ち帰り、七日間「鬼」の字の中心部分に灸を据え、再び柄杓を寺に納めると子どもの「かんの虫」が封じられるとのこと。

「どこからか話を聞いて、今も虫封じ祈願にくる親御さんが見えますよ」と住職が話す。本堂から少し離れた小屋に、高く積まれた柄杓の山が、子を思う親の気持ちを物語る。

「寺で蚊に刺されました。僕も虫封じをしたほうがいいですかねえ。」次回から出掛ける前に、虫除けスプレーをしてきてくれたまえ。」

シリーズ

阿久比を歩く ⑪⑫



“愛宕山”入口に立つ辻地蔵

卯之山の津嶋神社から南に下り、途中の細道から阿久比スポーツ村へ続く道を友人と二人で歩く。木々の葉は紅葉を始める。
分かれ道で小さな「辻地蔵」を見つけた。町文化財調査報告書の写真から「愛宕山地蔵尊」であることを確認。
風化して読めないが、高さ五センチほどの小さな地蔵脇には「右くさぎみち」「左 大のみち」と記

石造物を巡る(坂部・卯之山コース④)

あぐいぶらり旅

されると説明がある。「くさぎみち」の方へ進むと「愛宕山」と呼ばれた山があり、その入口に立つ地蔵なので「愛宕山地蔵尊」と呼ばれるようだ。
病気で亡くなった人を弔うため、昭和初期に造られた地蔵尊。今でも地元の人がさい銭と花を供える。私たちも手を合わせる。
阿久比スポーツ村の東側にあった愛宕山。愛宕山といえば、各地で防火の守護神とする信仰がある。『卯之山村絵図(弘化村絵図)』にも「愛宕社」とあり、信仰の場であったことがうかがえる。この山頂に大正天皇即位を記念して阿久比第二尋常高等小学校(現英比小学校)の運動場を整地。その記念碑が「御大典記念碑」。
記念碑を探す。畑で草刈りをする男性に尋ねた。年を聞くと七十七歳。「スポーツ医・科学研究所の近くにきつとあると思うよ。運動場があって、町中の子どもたちが集まうて運動会をした覚えがあるよ」

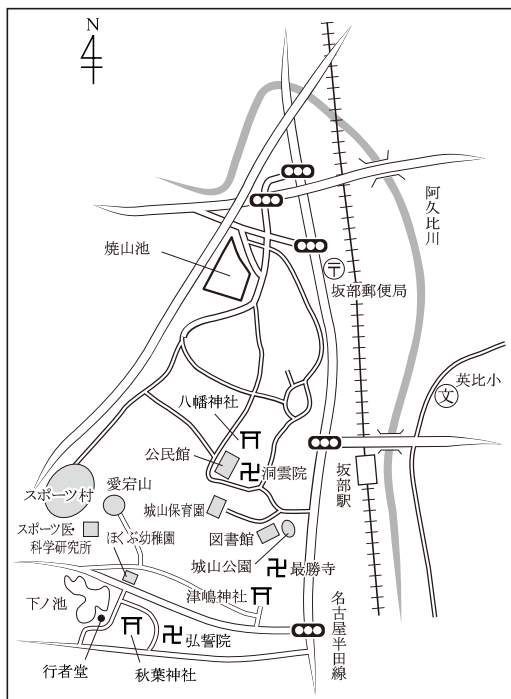
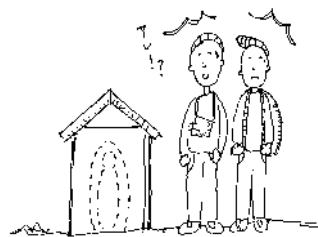
町誌には、運動場が大正四年に整備され、阿久比連合運動会が行われた記録の記述がある。へあたこのやまの そらはれて のぼる あさひの そらたかく 連合運動会で歌われた英比小学校応援歌も紹介されている。
運動場があったという形跡は残っていないが、雑木林に立つ記念碑を見つけた。今年は英比小学校が開校百周年を迎えた。百年の中の一ページに刻まれている場所であることには違いない。
「さっきのおじいさんも、運動会でこの辺りを頑張って走っていたんでしょね。ちなみに僕は走ることに自信がありましたから運動会ではいつも大活躍でした」と友人が自慢げに話す。「僕も陸上部だったからそれなりの活躍だったけどね」。
私もさりげなく自慢したが、今年娘の運動会では自らの体力の限界を感じてPTA種目を辞退した。



愛宕山山頂にあったとされる 御大典記念碑

シリーズ

阿久比を歩く ⑪③



“水垢離”が行われた下ノ池

下ノ池の周辺で「下之池垢離場行者像」を探す。ほくぶ幼稚園の正門付近から道を渡った場所に細道が続く。池に沿って歩くと、切妻屋根でコンクリート壁のお堂が見えてきた。お堂に近づき中をのぞくと「あるじ」がいない。しかも壁にスプレーで落書きがされている。壁にはめ込まれた石に「下之池垢離場行者像」や「行者堂新設（昭和五十八年）」の記述が見られる。行者像が置かれ

石造物を巡る（坂部・卯之山コース⑤）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

ていた場所に間違いない。

奈良県の大峰山に登る山岳修行がある。大正末期まで卯之山地区の若者は、大峰山に出掛ける前、遭難を避けるために、リーダー（先達）の下、白装束で下ノ池に入り、池の水で身を清めた。「水垢離」と呼ばれる儀式が七日間続けられた。

昭和五十一年に「卯之山同志講」が組織される。下ノ池での水垢離は行われなくなったが、心身を鍛える目的で峰入りが復活。どの時代も行者像に手を合わせてから、山へ向かうスタイルは変わらない。

「事件のにおいがしませんか」。友人が真剣な顔になる。消えた石像の行方を探すため、行者堂に刻まれた先達を訪ねることにした。

先達を務めた六十六歳の男性に、行者像のことを聞く。開口一番「たまらんわ」と肩を落とす。今年の八月に突然消えてしまったとのこと。心無い者がどこかへ持ち去ってしまったようだ。

「大峰山は若いころの良き思い出。



落書きをされ「あるじ」がいない行者堂

毎年一回、険しい道のりを仲間と励まし合いながら登り、人生の修行になったよ。無事、山から戻ってこられたのも、行者さんのお陰だと思っ

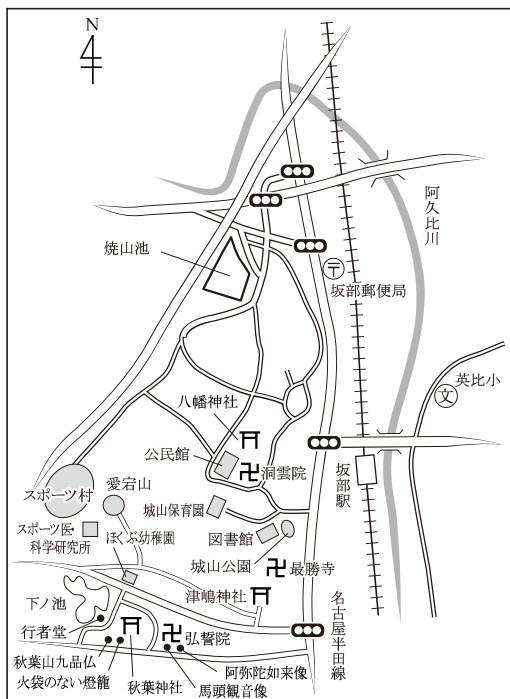
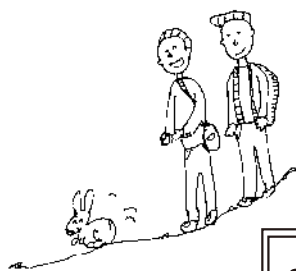
たあ」
男性は昔を懐かしみ、行者像がいなくなつたことを悲しむ。「早く見つかるといいですね」と声を掛け、再び池のほとりに戻る。

行者堂を新設して、行者像をまつるほど、信仰心の厚い人々の気持ち

がこもつた場所に、「あるじ」の姿が見られない。
池から冷たい風が吹き付ける。「皆さんのくやしさを考えると、やりきれないですよね」。友人の人間味あふれる言葉にうなずいた。

シリーズ

阿久比を歩く ①①④



弘誓院境内に安置される「阿彌陀如来像」

卯之山公園を通り、東側から秋葉山へ上るために造られた石段を上る。後ろを振り返ると、まちの景色が一望でき、高い場所にいることがよく分かる。

山頂には秋葉神社が整備され、左手奥に「火袋のない燈籠」と「秋葉山九品仏」が並ぶ。二種類の石造物はともに愛宕山山頂にあり、小学校運動場建設（坂部・卯之山コース④で紹介）のために現在の場所へ移さ

石造物を巡る（坂部・卯之山コース⑥）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

れた。

燈籠に火をともし「火袋」がないのは、運動場建設中に破損、九品仏は長泉寺（現最勝寺）二十九代秀首住職が元禄八（一六九五）年に建立した石造物だと文化財調査報告に解説がある。

極楽浄土へ往生する者は、生前に積んだ功德の違いで、九つの階位に分けられるといわれ、それぞれの極楽浄土にいる九体の阿彌陀仏を九品仏と呼ぶようだ。

「中央にいる仏さん、僕の顔に似てませんか」と友人が言う。「確かに、りりしいところが似ているかなあ」。仏の前で思ってもいないことを口にしてしまった私。反省しながら、仏に手を合わせる。

坂部・卯之山コースの最後に、弘誓院境内にまつられる「阿彌陀如来像」と「馬頭観音像」を探す。参道に大きく「筆塚」と記された石碑を横目に、弘誓院山門をくぐる。

老住職と話ができた。書院に通してもらい、抹茶をこちそうになる。



秋葉山山頂に並ぶ「火袋のない燈籠」と「九品仏」

「子どものころは近くの山にウサギ狩りによく行きましたよ」。うれしそうに話す老住職の瞳が少年の目の輝きになる。

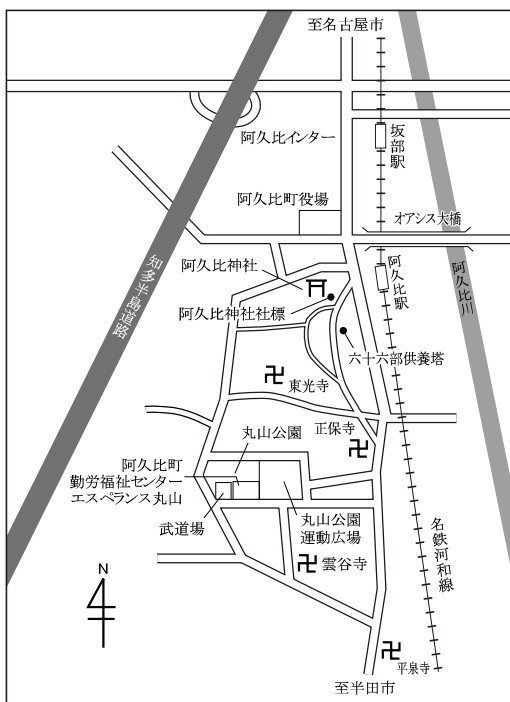
弘誓院の山号は「兜養山」。卯之山地区の地名は、この山号にちなみ「兜之山」と呼ぶようになったと伝わる。一昔前まで、本当にウサギがすんでいたようだ。

「阿彌陀如来像」と「馬頭観音像」を案内してもらおう。座ってひざの前で手を組む阿彌陀像は、小さなお堂の中に安置される。「寶曆二年壬申四月八日」の文字がはつきりと読める。牛馬の守護仏とされる馬頭観音は、山門近くで、ほかの石碑とともに並ぶ。屋根のある場所に置かれていないせいか、風化が激しい。

「二つとも私が住職になる前からあったみたいだからねえ。皆さんが花を供えて大事にしていますよ」

寺を後にして、細い坂道を下る。日が沈みかける。路地裏から白いネコが飛び出す。一瞬「ウサギ」かと思っただけは私も友人も同じだった。

シリーズ 阿久比を歩く⑪



阿久比神社入口に立つ 社標”

新しいコースで石造物巡りの「ぶらり旅」を続ける。
阿久比神社の「阿久比神社社標」を見る。鳥居の手前に「郷社 延喜式内 阿久比神社」と大きな文字が記された、見上げるほど高い社標が立つ。
平安時代初期の宮中の記録が書かれている『延喜式』。その第九と第十の「神名帳」に記載されている神社を「式内社」と呼ぶ。

石造物を巡る(阿久比・棕岡・美口・高岡コース⑦)

あぐいぶらり旅

式内社は由緒正しく、格式が高い神社だといわれる。阿久比神社は神名帳に「知多三座」の一つとして記され、はじめにあげられていることから、尾張知多郡の「一宮」と呼ばれていたようだ。

「♪一番はじめは一宮(いちのみや)♪と歌われるくらいだから、一宮と呼ばれることは、すごいことなんだよね」と友人がわらべ歌を歌いながら言う。「確かにそうだねえ。二番はどこだったかなあ」と私が聞く。「……」。

静かな神社境内だが、大晦日から元旦に日付が変わるころ、多くの人々にぎわいをみせるだろう。

阿久比神社を後にして、細道を南へ進む。次に「六十六部供養塔」を探す。『町文化財調査報告』では、「六十六カ所の霊場を巡礼して納経する信仰があり、修行者を六部ともいう」と解説がされる。

道路脇の一面に一基の常夜燈とお堂を見つめる。お堂の中をのぞく。中央に文字が刻まれた高さ五十センチ

ちほどの石がまつられる。

お堂近くの民家を尋ねる。男性が「六部さんのことだね」と話を聞かせてくれた。

修行途中の六部が行き倒れてしまふ。疫病がはやり、村人がこの地で亡くなった六部の「供養塔」をまつり、願を掛けると不思議に疫病が終息したという。

「今で言うインフルエンザだろうね。医学に勝る先人たちの思いがかなったということかなあ。春祭りには必ず「六部さん」の前で子どもたちが囃子の奉納もするし、阿久比地区では大切なものだよ。公会堂の近くには「行者さん」もいるし、帰りに見ていくといいよ」。

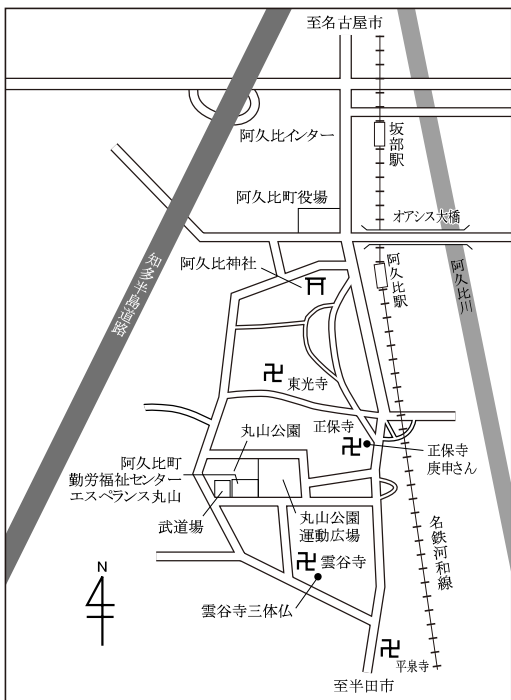
「地域で大切に守っていく。難しいことですけど、素晴らしいことですよねえ」。行者堂に手を合わせた後、目に映った、それぞれの民家から温もりが伝わってきた。



お堂の中にまつられる「六十六部供養塔」

シリーズ

阿久比を歩く ⑪①



車の通りを見つめる「庚申さん」

「夢を託した競馬の有馬記念は大敗。年末ジャンボ宝くじは惨敗。幸運の女神に会いたくないよ。何かいいことないかなあ」。私の「ぼやき」を友人に聞いてもらいながら、二〇一〇年最初のぶらり旅をスタートさせた。椋岡地区にある「正保寺庚申さん」を見る。「庚申堂」と記された看板が掲げられたお堂の中に高さ一メートル弱の石像が置かれる。町文化財調査報告」では、大祭がうるう年の秋

石造物を巡る(阿久比・椋岡・美濃・高岡コース②)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

分の日に行われ、新しい鉄鍋などの金気の濁りを取り除くいわれがある」と解説される。
石像は青面金剛像。庚申とは青面金剛の別称『阿久比町誌』によれば、野ざらしになっていた石像に、子どもたちがいたずらをする、お堂を建ててまつた」と記述がある。
中国に由来する民間信仰行事で、干支の庚申(かのえさる)の夜に、青面金剛像を徹夜してまつ。庚申講がある。夜眠てしまうと三尸(人の腹の中にいる三匹の虫)が罪を上帝に告げ、命を縮めるといわれる。
椋岡地区でも各家庭を持ち回る「庚申講」の組織が大正末期まで残っていたようだ。講元で青面金剛像をまつり、庚申の日には夕食を食べた後に、盗難防止や道の安全を願う念仏を唱えたとされる。徹夜をしたかは定かではない。
「庚申さん」は、役目を終えたという感じで、お堂の中から車の通りを静かに見つめている。ただ、心無

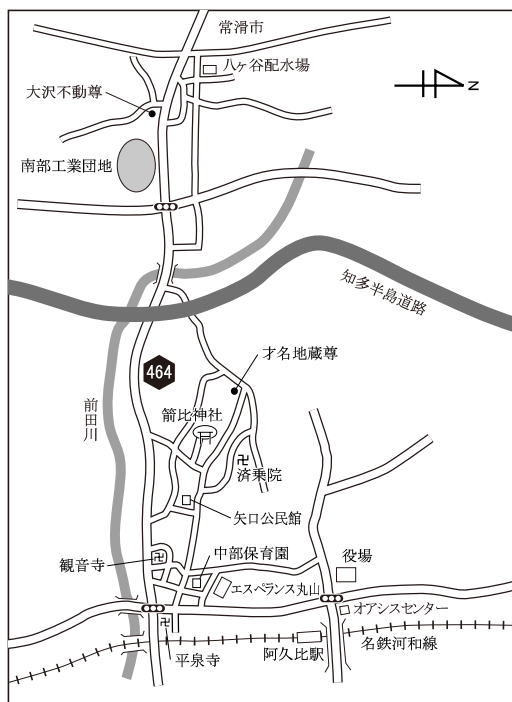
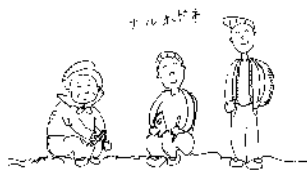
い何者かのいたずらにより、本来青色でなければならぬ顔が、赤いスプレーで塗られているのは残念。庚申さんに「お疲れさま」と声を掛け、次に向かう。
場所を雲谷寺に移し、「雲谷寺三休仏」を見る。山門をくぐってすぐの境内西側に三休が並ぶ。きれいに整備された庭の砂礫を崩さないよう、飛び石伝いに、石仏の前へと進む。
三休は江戸時代に造られた。右手を右ほおにあてがう石仏が中央に座る。痛い歯を押さえているような珍しい姿。歯痛を治す仏だと伝わり、「歯痛地藏」と呼ばれ、今でも手を合わせに訪れる人がいるとのこと。
「いろいろな仏や神がいますよね」と友人が言う。「今年こそ幸運の女神を見つけないなあ。なかなかほほ笑んでくれないけど。君は?」。「新年早々開運の予感がします。近いうちにうれしい報告がきそうです」。その先が気になったが、友人はそれ以上話してくれなかった。



中央が 歯痛地藏

シリーズ

阿久比を歩く⑪⑪



切り妻屋根の立派なお堂

矢口公民館を通り過ぎ、友人と二人でてくてくと坂を上る。左手に箭比神社の森を眺めながら進み、突き当たりを左に行くと、お堂が見える。道脇の一面で、切り妻屋根の立派なお堂の中にまつられるのは「才名地藏尊」。

扉の奥に、二つのちようちんが飾られ、日差しが差し込んでいられる。その合間から顔をのぞかせる地藏は白く光って見える。

石造物を巡る(阿久比・棕岡・矢口・高岡コース③)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

台座の上に立ち、高さが一メートルほど。『町文化財調査報告書』では、地藏の右脇に「西組念佛講中」、左脇に「寛延三年天」と記されると解説される。浮き出た地藏の左肩部分に「西」という文字ががすかに見える。顔の表情は、はつきりしない。

近くのミカン畑から、風に乗って甘酸っぱいにおいが漂ってくる。民家の倉庫に、摘み取られたミカンの詰まったプラスチックの箱が並ぶ。汚れたミカンで軒下の水道で洗う女性の姿が見えたので地藏尊について尋ねる。

毎年八月二十三日の夕方に、近所の人たちが地藏の周りに集まり、供物をして念仏を唱える「おまつり」をするとのこと。

「昔はこの日に、みんなでうなぎ井を食った覚えもあるし、嫁いできたころに、おじいさん(義父)から戦前は屋敷の前で芝居が上演された話を聞いたよ」。

西組を守る地藏を囲み、かつては盛大なイベントが行われていたよう

だ。

地藏に記される「西組念佛講中」の「念佛講」は今も続く。お堂から少し離れた畑で作業する女性が教えてくれた。

現在、十軒の家庭が順番に講元(当番)を務める。一月に一回講元の家に集まって、掛け軸を飾り、供物をして念仏を唱え、地区や家内安全を祈願する。

「年が大きくなって、講を続けられる人が減ってきましたが、念仏の後、お茶を飲みながら話をするのが楽しいですよ」と女性の表情が緩む。先人が作り出した、「講」は、立派なコミュニケーションの場として継承されている。

「出会った皆さん、にこやかな人ばかりだったよね」と私が言う。

「お地藏さんを大切にしている人たちだからですよ。最近、怖い顔してますよ。もう一度お地藏さんを眺めたらどうですか?」と友人に言われる。

再び地藏さんの前に立つ。「こういう顔だからしょうがない」と思いつつ深々と頭を下げ、次の石造物「大沢不動尊」を探しに先を急いだ。

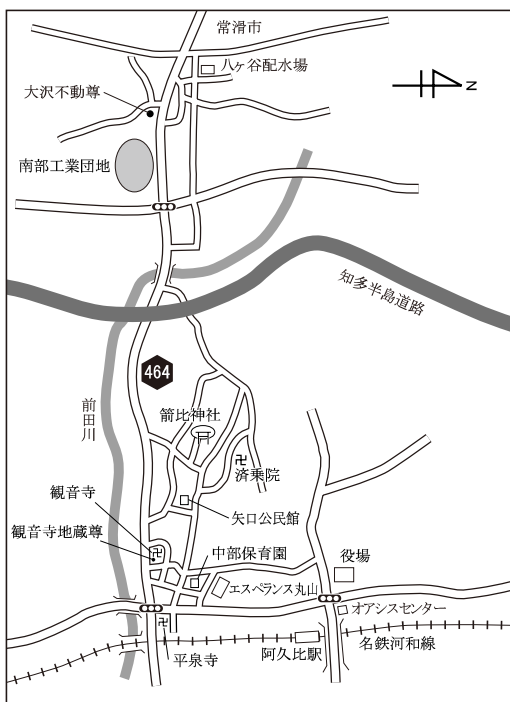
「大沢不動尊」を探しに先を急いだ。



“才名地藏尊”

シリーズ

阿久比を歩く ⑪



胸の前で子どもを抱く“子育て地藏”

南部工業団地の敷地内にある瓦工場を横目に、少し行った場所です。簡易なコンクリートブロックに納められた「大沢不動尊」を発見。辻地藏で、常滑の大野と植大にながる「山道」を知らせる役目をしてきたようだ。

今まで見てきた地藏とは少し違うユニークな顔立ち。体全体の割合からすると顔が大きく、面長の顔で、ほおから下の肉付きがいい。スカートのようなものを身にまとい、足が

石造物を巡る(阿久比・棕岡・美戸・高岡コース④)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

短い。

「足が短いのは僕と似ていますが、顔は・・・」。私の方を見て友人が言う。確かに顔は私と似た輪郭。正月、家族で撮った写真に写る、顔が膨れ上がった自分にそっくりだ。・・・言葉がない。

地藏に顔が似たということは新春から縁起がいい。気を良くして、次に観音寺を目指す。

観音寺へ続く石段手前のお堂に「観音寺地藏尊」がまつられる。失礼して扉を開かせてもらう。

中には高さが三十センチほど、胸の前で子どもを抱くように見える小さな地藏が立つ「子育て地藏菩薩」と記された木札には「家庭内暴力、登校拒否など子どもの悩みを良い方向へ導く」地藏であることが説明される。

「夏ごろにコウノトリが、子どもを運んでくれることになりました」と友人がもじもじと横で話す。突然の吉報。今年の初めから意味深な発言をして、にやついてた訳が分かった。友人の照れくさそうなくさからうれしさが伝わってくる。

「よかったなあ。おめでとう。子



ユニークな顔立ちの 大沢不動尊

育ては難しいよ。父親に甘えてくるのは、母親にしかれたときだけに。祝福の言葉を友人に掛けつつ、子を持つ先輩として現実の厳しさも教える。迷ったときは、「ここに来ます」と言葉を残し、石段を上り観音寺境内へと進む。

―知多路の春は知多四国弘法参りで始まる。この寺は知多四国八十八所霊場の十七番札所。岡崎から来たという夫婦が、寺を訪れた証しである朱印を奉納経に押してもらっている。

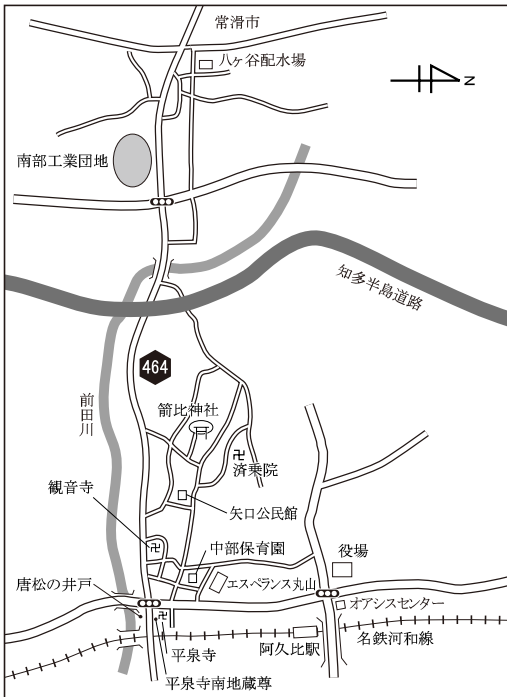
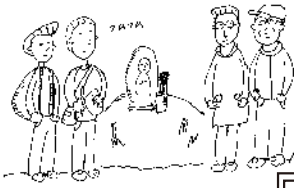
「昔、井戸に捨てられてしまったいたお地藏さんを地元の皆さんが、拾い出しておまつりしたんですよ。

子どもを抱く姿から『子育て地藏』と呼ばれるようになりました。親御さんらが子どもの成長を願い、手を合わせにみえますよ。女性の住職がやわらかい口調で話してくれた。

「安産にはご利益ありますか？」友人が住職に尋ねる。もちろんです。どうぞお参りください。石段を下り二度目の参拝に付き合った。

シリーズ

阿久比を歩く ⑪



“逸話が多く残る唐松の井戸”

棕岡地区の平泉寺南付近を友人と二人で歩く。立春は過ぎたが、風は冷たく肌寒い。
最初に「唐松の井戸」を見る。古井戸はガードレールを隔てた田んぼの一角にあり、四方を柵で囲まれる。いびつな二十個ほどの大きな石が井戸を囲む。今まで見てきた手の加わった地蔵や石碑とは違うが、石造物として紹介される。
唐松の井戸には、いくつかの逸話

石造物を巡る(阿久比・棕岡・矢口・高岡コース⑤)



が残る。
平安時代、天台宗山門派の祖慈覚大師(円仁)は淳和天皇の命により平泉寺を開創したと伝わる。その慈覚大師は日照りで水に苦しむ村人を助けたとされる。
井戸には一滴の水もない。大師は道に落ちていた石を拾って、ふき清め、経文を書き井戸の中に投げ入れる。一心不乱に読経をすると水がこんこんと湧き出してきた。
慈覚大師が祈とうしたゆえんで「延命の水」としてのうわさが広まり、遠方から水をくみに来た人もいたようだ。
「いつも元旦には井中に松影見ゆるとなん。されども近きあたりに松の木なし」(『尾張名所図会巻六』)。地元の人々が井戸の周りに松を植えても枯れてしまうとのこと。不思議な場所でもある。古井戸に水がたまる。濁った水に映るものはない。
神秘的な場所を後にして、道幅一メートルほどの細い坂道を北に向かう。上り切った場所の右側にこん

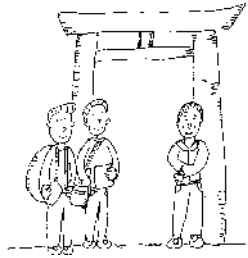


塚のてっぺんに立つ地蔵尊

りと盛り上がった塚がある。塚のてっぺんに高さ三十センチほどのかわいらしい地蔵が立つ。
「平泉寺南の地蔵尊」。この地蔵も慈覚大師とつながる『町文化財調査報告書』では、「生き埋めとなつた賊の悪霊にうなされる里人を救うために、慈覚大師が地蔵尊を建立した」と解説。
塚のすぐ後に建つ民家を訪ねる。夫婦で地蔵にまつわる話をしてくれた。「お花を供えて話しをすると、不思議ですが穏やかな気分になります。元気で暮らせるのもお地蔵さんのお陰かなあ」と奥さんは笑顔で話す。
「唐松の井戸、地蔵さん、平泉寺の本堂が立つ場所は一直線上にあると聞いたことがありますよ。慈覚大師との深い因縁ですかねえ」とご主人が説明してくれた。
知多四国十六番札所平泉寺に立ち寄る。本堂前に立ち「地蔵尊」、「唐松の井戸」の方角を眺めた。「うまく言えないけど、何か感じるよね」そうです。静かに境内を去った。

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



八幡神社の手前に立つ 大鳥居”

今回からは、植・大古根コースを巡る。雨上がりで風が強く、朝セツトした髪型が乱れる。花粉の飛ぶ勢いもよく、目の周りが異常にかく、春の訪れを体感する。

植大地区の八幡神社へ行き、「八幡神社鳥居」を見る。

県道西側に大きな鳥居が立つ。下から眺めると、鳥居の内側の構図に、石段から神社境内入り口に立つ鳥居までが納まる。石段脇に咲く黄色い

石造物を巡る(植・大古根コース⑦)

あぐいぶらり旅

スイセンの花が色を添える。

「大鳥居」横の自転車修理店の店主に声を掛けてみる。

「大きな鳥居ができて、びっくりした記憶があります」。親の代から続く店は、昭和十二年に現在の場所に移転。鳥居が建てられたのはその一年後の昭和十三年で、店主は小学二年生だったという。

「この鳥居は、今アピタがあるけど、あの場所に都築紡績をつくった「良平」さんのお父さんとお兄さんが寄付したものだ。昭和十九年と二十年にかなり大きい地震が起きたけど、当時はびくともしなかったね」と、長い間「鳥居」を見続ける店主が教えてくれた。

店主と別れて友人が「学生のとてあの自転車屋さんで、おじさんにパンクを修理してもらいましたよ」と言う。早く言えばいいのに。どんな学生だったか聞いてみたかったよ。

「おじさんは覚えてないと思います。が、おうちよこちよいでした」。「そうだったろうね」。

次に「島田樋門」を探す。名鉄電車の線路を渡る。

矢勝川堤防を整備しながらヒガンバナの球根を植える男性に尋ねた。

「除塵機がある辺にあつたはずだよ。坑(水門)があつて、新美南吉も少年時代に飛び込みをしたり、うなぎを取ったりして遊んだ場所だと聞くよ」と指を差す。

矢勝川は天井川で、低地は水はけが悪く、十ヶ川の排水に悩まされてきた。改善のため明治三十三年矢勝川をくぐる全長六十メートルの人造石樋管(十ヶ川の水を矢勝川の下から通す管)ができる。入り口の水門が「島田樋門」で、二つの丸い管を「眼鏡」に見立てて「めがね」と呼んでいたようだ。昭和四十九年と五十一年に起きた水害後は矢勝川の改修に伴い、島田樋門は姿を消す。

男性の話を聞きながら、自然は楽しさと恐ろしさの二面を常に持ち合わせていることを実感する。

「西側のように、こちらの堤防にもヒガンバナが一面に咲くといいですね」と男性に声を掛け、矢勝川と十ヶ川を後にした。



かつて「島田樋門」があった付近

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



竹やぶに埋まる 道標

植大野崎の信号を曲がり西へ向かう。知多半島道路下のトンネルをくぐり、しばらく行き、信号を直進して蟻塚根橋を渡る。西長子付近にあるとされる「道標」を探す。

周りは田んぼや雑木林。土手にはツクシが顔を出す。時折、鳥のさえずりが聞こえる。あぜ道に軽トラツクが止まる。農作業を終えて、雑木林の方から戻ってくる男性の姿が見えたので、「道標」について聞いてみる。

石造物を巡る(植・大古根コース②)

あぐいぶらり旅

た。

「二つあるよ。行ってみるかね」。快く案内役を引き受けてくれる。友人と男性の後に続く。

男性は「一つ目は、これだよ」と、竹やぶに埋もれる石造物を指差す。上部に阿弥陀立像の浮き彫りがはつきり見える。その下には「右大」、「左と」の文字が読み取れる。「右大の」、「左とこなべ」と記されているようだが、埋もれてしまい文字が見えない。

半田市に在住という男性は阿久比町地内で農業を営む。私たちが歩いてきた道は、男性いわく「黒鉄街道」と呼ばれていたようだ。

近世、知多半島の農家の人々は、毎年農閑期に少しでも収入を得て、生活を楽にしようと、各地方へ出稼ぎに出掛けた。主な仕事は土木工事で、工事に使う大きな黒色の鉄を持って出掛けたことから「黒鉄稼ぎ」と呼び、大正時代末まで続いたとされる。

「この道を使い、常滑の大野から

亀崎や三河へ多くの職人さんが出掛けたと聞くよ」。道標は、かつての主要街道の重要ポイントで、阿弥陀さんは、往来する人々を静かに見守った。

「もう一つはこの荒地の向こうだよ」。草木をかき分けなければ行くことができない場所に「九右工門地藏尊」があるらしい。「どうしてお地藏さんがあることを、知ってみえるのですか」と友人が尋ねる。「昔、牛車を引いて田んぼへ通った道で、いつも見てたからだよ」との返答。

目の前に小さな地藏が現れた。表に「右山田、左とこなべ」、裏側に「願主九右工門」の文字が刻まれると『町文化財調査報告書』に解説される。野ざらしで、緑色のコケが全体を覆う。

「この辺りは子どものころ春になると、ぼんつく」をして遊んだ場所だからね。ウナギやナマズが捕れたよ」。男性の目が童心に返る。

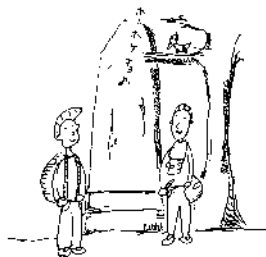
男性に出会えなければ二つの石造物の発見はなかった。「一期一会」ですよね。友人の言葉にうなずいた。



全体に緑色のコケが覆う 九右工門地藏尊

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



桜の木に囲まれる石碑

桜の花が見ごろを迎えた。友人と花見も兼ねながら、植地区の神明社へ、石造物を求めて「ぶらり旅」に出掛けた。

「神明社の森“東の裏側に立つ、端山忠左衛門氏彰徳碑”を訪れる。小高い丘の上に立ち、ひとときわ目立つ大きな石碑が「端山忠左衛門氏彰徳碑」。高さが約四メートル、幅が約一・五メートルで、とても重厚感がある。

石造物を巡る(植・大古根コース③)

あぐいぶらり旅

「端山忠左衛門氏は、弘化二(一八四五)年、碧海郡大浜村(現在の碧南市大浜町)に生まれ、幼名は寅次郎。五歳のとき植の端山家の養子として迎えられ、二十一歳のとき、忠左衛門」を襲名。

染色の研究や紡績会社、林業などを経営し、知多郡全域の産業や文化に貢献。明治十二(一八七九)年、初の愛知県会議員選挙で当選、その後通算三十余年県会議員を務める。

明治二十三(一八九〇)年、第一回衆議院選挙で当選(一期務める)。伊藤博文と親交を結び、改進黨(大隈派)と自由党(板垣派)と対抗する大成会を結成する。

大正四(一九一五)年享年七十一歳で生涯を閉じる。

政界や犬山城修復などの業績をたためるため石碑が建立されたようだ。明治二十四(一九一〇)年濃尾大地震で、犬山城(当時愛知県公園)が破損。多くの者は廃棄を唱えたが、端山氏の力説奮闘で城の修復が図られた。



端山忠左衛門氏彰徳碑

石碑の表面には、端山氏の功績が記され、裏面には建立に関わった人々の名前が記される。犬山藩主の末裔、成瀬家当主の名前のほか、「徳川」「中世」など著名な苗字が連ねられ、生前の交友関係の深さをつがいがい知ることができる。

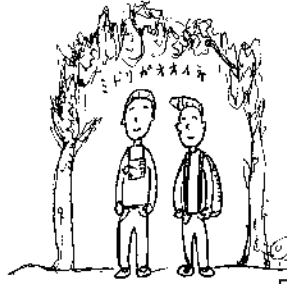
石碑近くの桜の花が満開。鎮守の森からウグイスの鳴き声がする。小さく「ホー、ホケキョ」。優しく「ホー、ホケキョ。キョキョキョキョキョキョキョ」。力強く「ホー」、ホケキョ。ウグイスたちの奏でる音色は心地いい。花見をしながら鳥の声を聞く。なかなか優雅だ。

「あと、お酒があつたら最高ですよ。ね。ぱー」といきたいですよ」と友人が言う。「もうすぐ、子どもが生まれるんだから、そんなこと言えるのも今年限りかもよ」と私が脅かす。「どうしてですか?」「宴会途中に子どもので携帯電話が鳴り、酔いがさめることばかりだと思ふよ」。

「ホー、ホケキョ」。誘惑のウグイスの鳴き声が、私たちの後ろから響いた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



新美応助翁顕彰碑

植地区の神明社を訪れる。二週間前に咲き誇っていた桜の花も散り、すっかり葉桜と変わる。それでも、残った花びらが一枚二枚と風に舞い、頭の上に落ちる。

「二週間前の花見もよかったですけど、新緑のまぶしさもたまりましたね」と友人が言う。「また、『お酒でもあったら』と言わないだろうね」と私が言葉を返す。四月はたくさん飲む機会があったので、今日は

石造物を巡る(植・大古根コース④)

あぐいぶらり旅

ジュースがいいです。」「その意見には同感だね。じゃあ後で飲もう」。

前回紹介した神明社裏の「端山忠左衛門氏彰徳碑」の後方に、新美応助翁顕彰碑が立つ。周りは樹木が茂り、日中でも薄暗いが、石碑には木漏れ日が差し込む。

『町文化財調査報告書』では、「一八一四死す。庄屋をつとめ人望厚く」とくに山林の保護育成に熱心で、半田池東方一帯の官有地に、老松屋なお暗く、天を摩していた。盗伐を防ぐため昼夜を選ばず見回ったという」と碑文に記されると解説されるが、石碑にはそのような文字は見当たらない。

石碑の前に立てられた白色のボードの看板に、端山氏と新美氏の経歴が紹介される。

新美応助氏は山林保護に力を注いだ人物。端山氏は、その功績をたたえ、峠ヶ峰に立派な「木碑」を建てた。木碑は時が経ち、腐朽してしまふ。その後、村民らの手によって新美氏の遺徳を偲び、明治三十九(一

九〇六)年、現在の場所に「石碑」として生まれ変わる。

経歴の紹介から、前述の碑文は木碑に記されていたことが推測できる。「山を守るとは、想像もつきませんよ」と友人が首をかしげる。「僕には務まらないだろうな。」「夜は怖いですからねえ。」「そうじゃなくて、花粉がたくさん飛びそうだからだよ。」「本当ですか?。それ以上会話は続かなかった。

境内の方から人の声が聞こえたので行ってみる。前日の祭礼の後片付けが行われていた。石碑について尋ねる。

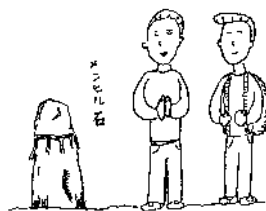
「石碑が立っていることは知っているけど、その人のことはよく分からないね。数人の男性が口をそろえる。」「神明社の森、五郷社の権現山と立派な森が近くに残っているのは先人たちのお陰だろうね」と、言葉に力を込めた一人の男性は、森を見つめていた。



経歴を紹介する立て看板

シリーズ

阿久比を歩く ⑫④



手前が「メンヒル石」奥が神明社拝殿

神明社南側から境内へ向かう参道が二つある。一つは石段、もう一つは「女坂」と呼ばれる緩やかな坂道の参道。両参道を上り切った接点に「メンヒル石」がある。

友人が石段、私は女坂から上り、「メンヒル石」を目指す。息が合えば、同時に目的地点に着けるはずだと思っけどねえ・・・」

お互いが意識してか、二人がほぼ同時に目的の場所に着く。気が合い

石造物を巡る(植・大古根コース⑤)

あぐいぶらり旅

ますね」と友人「もう五年、君とつしよに歩いているからね。一心同体だよ」「ちよつと気持ち悪いですな(笑)」。

四方を石柱で囲まれた中に「メンヒル石」がある。二人で持てば、なんとか運べるほどの大きさ。石の周りには、しめ縄が巻かれる。

メンヒルを事典で調べると「ケルト語で『長い石』を意味し、先史時代の巨石記念物の一種」とある。事典でいうメンヒルとは少し異なる。

昭和初期に人類学者の鳥居竜蔵博士が神明社を調査した際、境内にある石物を「メンヒル」と呼んだことから「メンヒル石」が俗称となった。

神の鎮座する場所を「盤座(いわくら)」といい、「メンヒル石」は、その盤座。古代のご神体といわれ、祭りの際、神が降りてくる霊石だとされる。

現在の神社には、拝殿が設けられ、参拝者は、その拝殿に向かい手を合わせているが、神の宿る盤座に手を合わせるのが本来の姿のようだ。



しめ縄が巻かれる「メンヒル石」

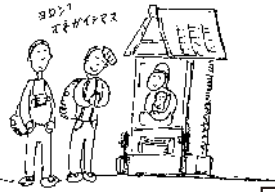
古代から伝承される神秘的な石。少し前に祭祀が行われ、その石に神が降りてきたばかりだ。盛大な祭りを楽しんだことだろう。メンヒル石に手を合わせ、境内を去る。私が石段、友人は女坂を下る。

「地区の社守をやっているときに、あなたが持っている『阿久比の石造物』でわしも、いろいろなことを勉強させてもらった。メンヒル石」はそれを読み、知ったよ。わしの歳でも、知らないことばかりだから、若い人たちは何も知らないだろうな。神社下で出会った七十八歳の男性と会話する。

「昔は、口伝いで伝わってきた話も、高齢者が一人二人と亡くなっていくと、なかなか後世にまで伝わらない時代になってきたからなあ。あなたたちも頑張っているいるなことを調べてくれよ」と、帰り際に宿題をもらった。

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



子安観音像が安置される「お堂」

「子どもが授かる縁起のいい、観音さんですよ」と、八十歳になる元気な男性が笑顔で話す。
植大地区の神明社南側の道路を東の方向へ歩いた場所に小さなお堂があり、その中に「子安観音像」が安置される。
お堂の扉は閉められ、格子の向こうには、子どもを抱いて座る高さ五十センチほどの観音像が見える。顔は優しく、ずきんをかぶる。石造巡

石造物を巡る(植・大古根コース⑥)

あぐいぶらり旅

りで多くの「子安観音像」を見てきたが、初めて見る姿だ。
男性は子安観音像にまつわる話を聞かせてくれた。
大正時代に通りがかりの行者が「屋敷の中で仏をまつていないか」と民家を尋ねてきた。実際に観音像は民家の敷地内でまつられていた。力のある仏だから、屋敷の外にお堂を造り、まつらないと、「家」が絶えてしまいますよ」と行者に言われ、観音像を門前へ移す。お堂は乙川の宮大工が無償で建立。後にその「家」は分家ができるようになったという。観音像はどんな理由で造られたかは不明。
結婚しても子どもに恵まれず、半ばあきらめかけていた女性が、観音像に「お百度参り」をしたら男の子が授かったというエピソードも紹介してくれた。
八月九日は観音の供養日。毎年知らないうちに「線香」が一箱届けられた。お百度参りがご利益で授かった子が結婚して、その妻となった人

物が線香の届け主。今の幸せがあるのは主人と一緒に生まれたから。もし主人がこの世に生まれていなかったら・・・」。嫁ぎ先の義母から聞いた「願掛け」の話に感銘して、線香を毎年供養日の人知れぬ時間に、観音像の前へ届けた。
先述した行者が訪れた民家は、話をしてくれた男性の実家。子安観音像の逸話を伝え聞いているため、奥さんを亡くされてからも「観音さん」の世話を続ける。
「もうそろそろ、生まれるころだよねえ」。第一子誕生を待ちわびる友人に、私が話し掛ける。隣で聞いていた男性が「子安観音さんの前で偶然だね。おめでとう。奥さんによるしくね」と優しく声を掛ける。「今日は、観音さんに無事子どもが生まれるように、しっかりとお願いしようと思います」。友人の言葉に力が入っていた。



優しい表情の 子安観音像”

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



猪俣氏の功績が書かれた『猪俣六三氏略伝』

植大東山ノ手の町消防団第五分団の詰所前に「巡拝塔弘法像」が立つ。高く積まれた石の上に、三段の石が積み、その上の蓮台に足を組む柔和な顔をした「弘法さん」が座る。三代に渡り、弘法像に花やおぼくさん（仏に供えるご飯）を供え、世話しているという女性に出会えた。弘法像は猪俣録造安春氏が明治三十九年に建立。この人物について尋ねた。

石造物を巡る（植・大古根コース⑦）

あぐいぶらり旅

「こつぽうじい」がお祈りすると、病気が治ったり、のどに刺さった魚の骨が取れたり、不思議な力を持った人だったらしいですよ」

地区の「鵜の家」（通称「弘法堂」）に案内され、「詳しいことは、ここに書かれています」と、女性が『猪俣六三氏略伝』弘法像には録造と記されているが六三と表記）と表紙に記された古い帳面を見せてくれた。そこには地元の人々がまとめた、猪俣氏の生い立ちや功績が、手書きの文字で綴られていた。

猪俣氏は安政五（一八五八）年福島県に生まれる。病気を治すために四国八十八ヶ所巡拝を始める。その後、知多四国も巡るようになり、あるとき「植村」に有名な漢方医がいると聞き植村を訪れる。病氣療養のため植村で生活。村人らも彼を親切に受け入れ、住む場所などを提供した。

彼は知多四国の巡礼を続け、あるとき修行者から「大師の尊像」と「鉄の棒」をもらい、加持祈祷の秘



柔和な顔をする「弘法さん」

法を伝授される。鉄の棒を病んでいる部分にかざすと治ったり、失っていたものを探し出したりするなど、不思議な力で人々を救ったとされる。不思議な力の話は広く伝わり、多くの者が猪俣氏を訪ね、謝礼を置いていくようになる。謝礼は村人に世話になった理由から、寺や神社、学校などに寄付された。

巡拝塔弘法像も猪俣氏の寄付によるもの。猪俣氏が亡くなつてから七十四年たつたが「親が世話になつたから」と、弘法堂の仏壇や弘法像に毎月手を合わせに訪れる人がいるという。

「こつぽうじい」の逸話は義母からよく聞きました。私の実家も弘法宿をやっていましたので、弘法さんとは縁が切れません『お蔭様』の気持ち忘れずに暮らしています。先人が大切にしてきたものを守り続ける女性の優しさが伝わってきた。

「石造物を巡る」の連載は今回で終了します。次回からは「建造物を見る」を連載します。